武道雜誌
266
295

特64
280

眠氣さまし誌

九山色穆主人 編

東京
日就社發行

明治
44. 7. 1
内交

眠氣さま誌目次

矢大臣と左大臣……一
貧乏神の御見舞……二
馬工郎と又九郎……三
茶の湯の最中に「にゃん」……四
放蕩ものにならぬ呪……五
ばか賣……六
火鉢に嫉妬……七
銀の大黒……八
殿様にもゝんぐわあ……九
貧乏神の遷宮……一三
鍼の療治の大失策……一四
小督(箏唄)……二四
長れながらバアー……二六

窮した頓智……二七
大皷は鯛の皮……二八
私も三年目でお目に懸る……二九
花嫁は六十……二九
田舎者の胴忘れ……三一
大家の源兵衛さん……三二
女夫喧嘩犬も喰はぬ……四九
武士の嗜の錆刀……五〇
梅法師は昔の皺……五一
蚤の三番叟……五二
饅頭を喰はぬ土地……五三
布海苔の代りに疊鰯……五六
下手な相手のない不自由……五七
木で鼻をくゝる……五九
宿賃忘れの若衆……六〇

遠眼鏡へ耳をおしつける……六一
望遠鏡の黒焼……六二
江戸者と上方者の言葉爭ひ……六五
人の事を云つて自分も忘れた……七六
念病……七七
釣り好……七八
看病に往て病人に茶を酌ませる……七九
花車岩井扇（江戸長唄）……八〇
聖人に夢なし……八二
椽の下から道出る上戸……八三
白眼競の會……八五
盜みをさめの辞世……八六
妹背の鯨……八七
太々神樂の代りに金柑神樂……九五
竹光の名刀……九七

但馬國の尻うち……九八
ぶせう者の寄合……九八
一條戻橋の化物の由來……一〇〇
謠好と薪屋……一〇三
狸の腹鼓……一〇三
狐のお化と道中……一〇四
聲よき者は龍宮で欲しがる……一一六
娘と思ふて母親の手……一一八
浪人の腹切廻り……一二〇
若返りの瀧の水……一二二
男の臀を拜み歩く……一二三
痴話喧嘩……一二五
妙薬の奇特……一三四
今度の主人もしばい奴……一三五、
孝行者竹の子に尻を突かる……一三六

瀧鉢を知らぬ百姓……一三八
天竺浪人の宿……一三九
四國に狐の棲まぬ由來……一四〇
坊主は將棋倒になつて死ぬる……一四三
問はぬは末代の恥……一四四
土用最中の日の見の宴……一四六
相撲狂……一七〇
時宜のいひ置……一七一
手習子（江戸長唄）……一七二
龍田姫は古猫……一七四
丁稚が下女への無心……一七七
曲　屁……一七八
惡方詣……一七九
雷神と臍……一八七
貸さうか土葬だ……一九〇

雜炊の化の皮……一九一
やわらの懸引……一九一
正月は物いまい……一九三
れりま大根のやうなもの……一九四
貴僧を殺して坊主に生れ替る……一九五
以上

目次畢

眠氣さま誌

水光山色樓主人 編

矢大臣と左大臣

父子で天神様へ參詣した、其時息子親父にむかひ、この門の兩脇にある矢大臣左大臣といふのは、何方が矢大臣で何方が左大臣だと聞く、親父眞面目になり、よく覺えて置け、矢大臣でない方が左大臣で、左大臣でない方が矢大臣だ。（作者未詳）

貧乏神の御見舞

今年は珍らしく回向院で貧乏神の開帳が有るとの事、方々へ札が出て居る、讀むで見たれば、御參詣無之御方べは此方より御見舞可申候。

（明和版鹿の子餅）

のして疊んで花見のはれ着
春は算筯の底へ行く

馬九郎と又九郎

唐橋の邊に酒賣る翁あり、固より無筆にて、帳に繪を書きて記憶とし、十二月二十日ばかりに物書く人を賴みて、酒手の書付をさせ、借りたる人の許に遣はして、代をば取る事なり、繪の書きたる有樣色々ある中に、馬の前足の間へ人の顏を差入れて、嚙付きて居る所あり、是は如何なる事ぞと問へば、馬を喰ふ所は、馬九郎といふ事なり、馬の股を喰ふ所は、又九郎といふ所なりといふに可笑しく斯くぞ詠みける。

馬九郎と又九郎とを一つ繪に書くは誠に覺え難かろ、（曾呂利狂歌咄）

茶の湯の最中に「にやん」

時津風枝をならさぬ門の松、たちかへる春の初空、みどりの竹のひとふしを、常盤の友と愛し、玉川の風流をたのしむ人ありけり、初茶の湯をもよほし、露地の飛石みぎりをはらひ、手水鉢の若水きよらかにして、同志をまねきしに、をの〳〵待合に、にじりあがり、數寄屋に入、先水仙になびきより、掛物其ほか、飾のしほらしきに氣をつけ、あらたまのことぶき會席も過ければ、亭主やがて爐のもとにより、客にあひさつしてさて茶入の蓋をとる折ふし、天井にて鼠あれければ、亭主心得其まゝ茶入の蓋をする、客衆これはお氣の

つきたる儀、すこしのほこりをもいとはせらるゝ御心ばせ、中〳〵今日の茶の湯はなどゝほめければ、亭主いやはやといふて自慢くさく十面し、しばしありて、さて茶碗へ茶をいるゝとき、又天井にてねづみあれければ、亭主あわてゝすべきやうなく、其まゝ茶杓を棄てゝ鼻をつまんでにやんといふた。（初音草噺大鑑）

放蕩ものにならぬ呪

如何なる據所によつてこれが放蕩者にならぬ呪になるかは不分明とのことだが、兎に角古くより金武扇と稱する圓扇狀のサボテンを擦金で擦して、その汁を呑ませる、尤も十五歳前の小兒でなければ効、

驗が無いといふ。

ばか賣

年の頃廿二三な野郎が、まるひたひで鼻の下が長くツてゆきの短い着物をきて水洟をたらし盤臺をかついで、大ばか〳〵と賣て來る、アレ見やれほんに大ばか〳〵といふが、あいつの面がばかの看板だと笑ひながら、ばかを買つて喰ふコレばかやい〳〵とよべど行き過るに大聲あげ、ヤイ大ばかヤイ大ばか野郎コレ買てやらうばかやい〳〵といへば、やう〳〵と聞つけてのら〳〵戻り、ばかはおめへか、ム、おれだ。（寛政版　ことはの花）

火鉢に嫉妬

女の性はひがみて常に嫉妬深きゆゑ、佛も玉の障ありと說たまふことはりなるかな、下京邊に、玉椿の八千世とかはらぬ契りをかはして住む祖父と祖母ありしが、祖父七十にあまりて寒氣に堪へがたければ、土火鉢を求め、晝は膝をはなさず、夜は夜床に入て、年よりたる身は思ふことも心にかなはねば、そなたを抱いて身のしわをもあたゝむれば、祖母にはまさりていとをしの妻やとて、火鉢をなでさすりて調法しけるを、うば聞いて腹を立て、憎き祖父が言語や、惣じてあの火鉢がうせをつてから、祖父かおれに面色を惡うしをる、

あな腹だちやと思ひ、祖父が隣へゆきたる留守に火鉢を引出し、おのれめはようも〳〵おれが祖父をねとらうとしをる、此うばが目の黒いうちは思ひもよらぬこと、はやう出てゆけと、火鉢を取て溝の中へ投しに、火鉢の火に水入しかば、ぢい〳〵と鳴りしを、祖母聞いて、あら腹だちやまだおのれはぢい〳〵とぬかすかとて、うちくだいてすてたり。（作者未詳）

銀の大黒

ある人途中にて銀の大黒を拾ひ大きに悦び宅へかへり神棚へ上て置たれば、前からあッた大黒様が腹を立て後から來た大黒を置くまいといふに、銀の大黒きかぬ氣で、なんだおれに下ろといふのかふさふさしい、おらは只の大黒ではない白銀様だぞ、おのしらにあげさげをされるものけい、ヲヽ白銀でも古銀でもうぬがはりこみをくッてつまるものかと槌をふり上げて頭をがつちり、もうきかれぬ、と銀の大黒片肌ぬげば下が銅。（作者未詳）

殿様にもゝんぐわあ

爰に大和田源太左衛門といふ浪人ありて、永々の浪人にて尾羽打枯らし、埋木の花咲くべくも見えず、身の成るはての哀れらしき有様なれども、心は未だ更らに衰へず、あなたこなたに勤めけるに、

或時いつも目をかけらるゝ御屋敷へまゐりけるに、お客の方様へ彼の源太左衛門を知る人になされければなかなか懇ろに仰せられ、似合しき所もあらんには、肝を煎るべし、身の方へもちとまゐられよ、さりながら方々へ勤むるゆへ暇なし、來る十一日には宿に居るなれば、暇にをいては御出を待つと仰せければ、

餘りに嬉しくて、住吉の前に二葉を植名添へて、千年待つ心にて十一日を遲しと待ちけり、其日限になれば、垢たれたる黒羽二重に、時ならぬ綟の肩衣など、衣紋けだかく引繕ひまゐりけるに、奏者出合ひて、ない〳〵御自分の事旦那申付け置かれましたとて座敷に請じ、暫らくあつて口上仰出されけるは、よくお出なされた、御待遠はござらうが、月代に剃りかゝりました、暫らく待たせ給へとあつて、茶煙草盆出し又菓子を澤山に積み持ち出て、浪人の前に置く、浪人は隅の方に固くなりゐけるに、家中の子なりけん、六ツ七ツばかりの髪を打ちひらかしたるが、障子をそろりとあけて、浪人の顔を見がら、彼の菓子を盗みて、障子の蔭に行きて喰ふ、また來て

は取りて行きける、浪人心に思ふやうはさて〳〵氣の毒な事じや浪人がひだるさに菓子をあらしたと思はれなん事よ、口惜や、おぞして見んと思ひて、また來ける程に目と鼻に手を當てゝ、目口をひろげてもゝんぐわあといへば、彼の子供驚きて遁げまた來れはおどし、二三度しけるが、又障子をあけて來る、彼の子供と思ひ目口ひろげてもゝんぐわあといへば殿なり、其まゝ御歸りあつて、さて〳〵浪人は狂氣さうな、急いで返へせと仰せける、奏者來つて、旦那用の儀有之まかり出られまする、先づお歸りなされませい、重ねて此方から呼びに進ずべき旨申さるゝといはるゝに、浪人さては今のもゝんぐわあ故と思ひながら、是非なく座敷を立ける、玄關口へ出ければ、又彼のいたづら餓鬼玄關の脇に居ける、さても此子め故進退とりそこなうたと思ひ、憎さも憎し、又もゝんぐわあと目口ひろげておどしければ、見る人いよ〳〵狂氣に極まつたと言はれた。（作者未詳）

貧乏神の遷宮

不定なることは大やうたがはずとは世の常なり、さる浪人方々と稼ぎて、大方すみよればはづれ、あるひは、さわりありてありつかず、とくおれには貧乏神八十末社まで取つきたるにやと述懷し、うか〳〵と年月をおくり、さん〴〵尾羽うちかれ、火ふく力もなきやうになりければ、貧乏神出現していふやう、今まで隨分影身にそひて

ゐたれども、最早たいすみもならねば、他所へ社をかゆるぞとて、門口へ出て行く、浪人難有しと喜び、女房を呼び、最早仕合がなをつたぞ、此紙子羽織を質に置て、酒を買つて來い、祝ひに飲まんといひつくる時、貧乏神たちかへり、いや〳〵それを見ては、今日はまだいなれぬといふた。扨は悲しや。（作者未詳）

鍼の療治の大失策

一八「ハテ貴郎は針醫に御成り遊ばしましたか、息子「ウム何うだ感心だろう、二「多年婦人を泣した罪障消滅の爲めに、針を覺えて人を救はうと云ふのは感ずるに餘りあり」と來ましたな、私は針が好きでゲスから、然んなら早速願ひませう……、然し何年御修業に成りましたか、恰度足掛三年御目に掛りませんから、三年も御修業被爲ましたか、息「所が四五日跡に始めたんだ、二「四五日跡に……、息「アヽ未だ人間を試つたことが無いんだ、其所で君の身躰を借りて稽古を爲て見やうと思つて、實は先生の所へ入門爲ると、直ぐ針を持たして呉れるのかと思つたら、少とも持たして呉れないから、癪に障つて行ずに居ると、家へ出入の按摩が、枕の括りを突刺て稽古を爲た方が早いと云ふから、枕を三十分斗り突刺て見たが、面白く無へから、何か活物で修行を致したいと思つて居る所へ、猫が來たから、取捕てへ尾から五分斗りの所へ針を爲て遣つたスルト是れ見なせ

へ、如斯に手を引掻れて仕舞つた、然うも痛いかと、己れの膝を突刺て見ると、餘ッ程痛い、其所で此りやア其所を突刺ては痛い、其所は不可ないと、惡い所を云ッて呉れる物で稽古を爲なければ腕が上達らんと考へ、誰に賴まうかと、色々考へると、君のことを思ひ出して、一八てへ男は平常から慾……、イエナニ一八は何事も心得て居る、那の男に賴んで身躰を借りやうと、斯う思つて遣つて來たんだが、サア和郎針が好だつて云ふんだから、一ッ遣りませう、

一「有難う存じ升が、五圓の金子は返上致しますから、此りや一ッ御免を蒙りたいもんで、息「奈是……、二「奈是つたつて、私も針が好で御座いますから、隨分下手な針醫にも邂逅りましたが、貴郎の

は形無しなんだ……、失禮乍ら……、如何程針が好だつて、枕の括りから猫へ飛んで、膝ッ子僧から私へ直接飛の針は恐れ入りましたなア、只管御免を蒙りたいもんで、人間は私が始めてなんだから……、息「不可んか、二「ヘエ外の御用は何でも勤めますが、此儀は平に御用捨を……、息「然うか、と顏の色を變て、煙草入を仕舞ひ、金子を突出して、立掛りましたが、人の顏色を見る一八故、

一「マア若旦那……、息「何を云やがると、突然一つ撲打りました、二「ヘエ有難う存じます、貴郎御立腹被爲ちやア不可ませんヨ、

息「御立腹も無へもんだ、家康公が土の團子だとか何とか、笠森稻荷の御託宣髣髴なことを云やアがつて、汝だつて粹も甘へも知てる

幇間ぢやアの無へか五兩貰つて夫で御終になると思つて居やアがるか、萬一汝が温順に針を打して、三日も乃公を通したら、公債證書の五枚に、地面の一ケ所位へは、汝に遣らうと思つて、二「マヽヽヽ然う御怒り遊しますと云ふのは若いなア、息「若いヨ和郎の樣な爺いで無へから、二「願ひ升ヨ、自若と爲て居れば、公債證書五枚に、地面の一ケ所位は下さるつてへのは眞實ですか、息「打せるか打せればいい遣るヨ、二「だが若旦那、何うでも好いが、鳥渡伺つて置きますが、公債證書〳〵だつて、十錢の公債證書五枚ぢやアの御座いますまいなア、息「然んな公債證書が有るもんかな、二「地面だつて一坪ぢやア有りませんまいな、息「好いヨ、萬事は乃公の胸に有る、サア打たう……、

二「マア御待ち遊ばせ、公債證書と地面だから、大抵なら願ひたいけれども……、枕の括りから猫へ飛んで、膝ッ子僧から私へ……と、涙をボロ〳〵流して、二「願ます若旦那、（泣聲）……死すべき時に死せざれば、死に勝るの恥あり、死生命あり富貴大に在り……、願ひますが、若旦那、何處へ最初先づ御打ち遊ばすんでゲスへ、息「嫌か、二「願ふことは願ひますが、若旦那踵へ最初打て見て下さいな、息「然んなことを云つて嫌なら御止しヨ、二「イエ願ますヨ……、息「遣るんなら其處へ寢なさい、痰の根を切て遣らアと、漸くに其處へ一八を寢かしました、胸を撫で始めました、息「何うだ一八斯う胸を撫つたところは好い心持ちだろう、二「ヘエ好い心持でゲ

ス、息「コー捻つたら何うだ……、二「ア、痛う御座いますヨ、息「サア是から療治に掛るんだヨ、二「へイ……南無阿彌陀佛……、漸、のことで、若旦那が一本水落の處へ針を打ちましたが、針と云ふものは、二分計り這入ると、横にズン〳〵入つて仕舞ふもんで　面白さに皆な入れて仕舞ましたから、肉と熱が搦んで、如何程拔うど思ても拔けない、二「此りや若旦那、大變に痛ふ御座いますが、何う爲たんで御座います、息「何う爲たんだか拔なく成つちまつたヨ、二「拔けなくつちやア大變だ、息「其處を我慢爲るのが公債證書の價値ちだ動いたつて不可ないよ、先づ物に譬へて見れば、和郎も幇間を爲て居て、御存知だらうが、若い者が女郎買に行くだらう、二「へエ、

息「女郎買に往て男が三分其女郎に惚れて、女郎が七分其御客に惚れてると思ひなせへ、二「若旦那針を打放して、女郎買の話しを爲て居ちやア不可ませんねへ、息「マアさ花魁が惚れて居れば其男は歸りませんよ、思ひ切て歸つて來れば、亦逢ふことも出來るが、ツイ親も兄弟も主人も忘れて仕舞つて、流連けを爲る氣に成る、此針も然うだ、買立の針だから未だ若いや、處で此肉が針に惚れたやうなもんだ、お前は歸しませんよと云ふんで、肉と血が針を留めた、二「詰らねへものが留めたもんでゲスねへ、何う被爲んです、息「斯う云ふ時には、モー一本友達の針を打て、意見を爲て連れて歸つて貰ふより詮方が無いと、若旦那止せば好いのに、亦一本打つて、是も悉皆

突込んで仕舞ひましたから、扱なく成つて仕舞ました、二「大變に痛う御座いますねへ、(泣聲)ドー……何う成りますんで、鳥「泣たつて詮方が無い、御迎ひ針を一本遣つて見たが、若い者が遊んでる處へ若い者が迎ひに往つたんだから堪らない、木伊乃取が木伊乃に成つて仕舞つたんだ、今度は老年針を遣つて、二人の若い奴を説得爲せるより詮方がない、二「若旦那亦一緒に遊んじまやア爲ませんかねへ、鳥「大丈夫だよ、今度のは年老だから、と亦一本打ちましたが、是亦扱けません、今迄は公債證書に地面と云ふかどで、我慢を爲て居りましたが、モー三本打たれたのだから、痛くツて居ても立つても堪りません、二「若旦那何うも非常に痛う御座いますが、老年針の

意見が利いて扱けましたか、鳥「何う爲たんだか扱けないよ、老年だつて此道は惡く無へからなア、二「大變ですなア……、(泣聲)何う成りませう……、若旦那も今更詮方が無いから、一生懸命引張たが何う爲ても扱けない、少し焦慮て、三本の針を寄せて置て、爪を掛けてグーッと引張りましたから、針は漸く扱けましたが、皮が破れて血がタラ〳〵と流れたから、一八は驚いて、年齡甲斐も無く、二「アレ……と聲を立てましたから、若旦那は其聲に驚いて、戸外へ飛出して、何處かへ逃て仕舞ひました、長屋の者は其聲に驚いて、一八の家へ馳付けて見ると、一八は泣いて居りますから、甲「一八さん何う爲たんだよ、ヲヤ〳〵腹から血が出て居るが……、切

腹を爲たのかい、二「切腹處か、私は自腹を切つたことも有りやア爲ませんや、乙「何う云ふ譯だい、二「斯う〳〵云ふ譯で御座ると話しをする、乙『若旦那を逃して仕舞つては、一文にも成らないぢやア無いか、二「成らない〳〵と被仰つて下さるな、破幇間だからモー鳴らない。（こさん）

小督

小鹿鳴く、この山里と詠じけん、嵯峨の邊の　秋の頃、千草の花も　樣々に、蟲の恨も　深き夜の、月に松蟲　招くは尾花、萩には露の玉蟲や、そよぐ笹蟲、轡蟲、鳴くれにつれて　仲國が、察のおん馬　賜ばりて、宿直姿の　ふち袴、尋ぬる人の、面影に、立つ薄霧の　女郎花、それかあらぬか　幻の、蓬が島れ　尋れわび、駒引き留むる笹のくま、やすらふ蔭の松風に　通ふ爪音　つま繼ひの、音に寄る鹿に　あられども、昔おぼゆる笛竹や、合す調の　まがひなき、聲をしるべに　慕ひ寄る、嵯峨野の奥の　片折戸、想夫戀の唱歌は、比翼の鈴の　雲井を戀ひ、盤渉調の調は　松の連理の枝に通ふ。小督の局　世を忍ぶ、住家も明日は　大原に、變へん姿の　名殘とて、夜半に手馴す　つま琴の、岩越す思ひ　せきかれて、涙に袖を　貸はゞや、人めもいかゞ　あやめがた、糸の色音を　しろべにて、さし入る月の　雲ゐより、御使に、參りしと、かしこき君が　みことのり、野邊の遠方　分け來つゝ、露の玉章　さしよする　妻戸の端の　緣の綱、又引結ぶ　御返言、添へて賜ばる　五つ衣、後朝送る　ほどもなく、迎の車　奉り、昔にかへる百磯や〳〵、千代を契りの　松の音の葉。（箏唄）

畏れながらバアー

國家老初めて江戸屋敷へまかり出で殿様へ御目見えの時、御意には小兒が笑ふほどに近ふよつてあやして見いとの仰せ、ハヽツと治部右衛門恐入平伏す、近習の衆氣の毒がり、御意でムるおあやしなされませといふ、治部右衛門やう〳〵顔を上げ、ハヽ畏れながらバアー。（座敷話）

戀衣きたくはあれど右左
前も後も背を向けてゐぬ　（竹馬）

窮した頓智

水道の水の味、人の心を汲しりて、江戸小判のつかみ取とし〳〵富をかさねければ、錦を着て古郷へのぼりけるに、古き友だち見舞に來り、久しうて御目にかゝつた、江戸にて仕合よく大分の御身代とうけたまはつた、さだめて子ども衆も大勢ござらうと問ひければ、いや子どもは三人ぐざるといへば、さぞ總領殿は男子であらう、いや女子なりといふ、それならば次は男でござらう、いや女なりといふ、しからば三人めはさしづめ男ならんといへば、近頃面目なけれど、みな女子じやといふ、友だち手もちなく當惑ながら、されども

こなたが男で仕合じやといふた。　（作者未詳）

大鼓は鯛の皮

「三味線は猫の皮だから膝の上にのるはさこえたが、鼓は何の皮だなア、アリや「猿の皮だから、肩に乗るのさ、「ムヽそんなら大鼓は「あれか、アヽ待よ、あれは脇の下へ挾むナ、鯛の皮だらう。

（作者未詳）

私も三年目でお目に懸る

久しぶりで知己の人に遭遇ひ、コレハ源兵衛さんしばらく、コレハ六右衛門さんしばらく併いつも御機嫌よく皆さんお變りもムいませんで、ヘエ難有貴方でも、ヘエ難有ませアかうと丁度三年お目かゝりません、左樣私も丁度三年お目にかゝりません。　（猛々庵）

花嫁は六十

あるもの女房をよびて婚禮の夜つくづく見るに、大な年増なれば一間に入て後、おのしはいくつになりやると言へば、アイわたしは丁

度四十でムります、ハテ媒人の口では三十じやと聞たが四十といやるは覺束ない眞の年はいくつだざつと言やれとたび〳〵問ひけれども、やつぱり四十と言ふにどうぞして眞の年を聞たく工夫して居りしが、ふと思出しいきなり眞裸になつて駈出すに女房肝をつぶしマアあなたどこへお出なさいます、いや宵に鹽壺の蓋をせなんだ鼠に喰はれやうから直してこやうと言へば、ハテとんだ事を言ひなさるわたしも此年になるが遂ぞ鼠が鹽を喰べたと言ふことは六十年この方聞たことがない。（十千萬兩）

【三〇】

田舍者の胴忘れ

通り町三丁目へ年頃なる男來りて、若き者に向ひ、ちと物たづねましたいといふ、何事ぞと問へば、此所等に尋ねたき人ありといふ、名は何と問へば、忘れ申たといふ、家名はと問へば、是も忘れました、さて途方も無事をいふ人じや、それでは知れぬといへば、私はは〳〵遠き水戸からまゐつたものでござる、教へて下されねば、二日路の路を歸ります、さりとはといふ、此男も氣の毒に思ひて、責めてかたしろでも覺へ給はぬかと問へば、名も家名も皆さすやうなといふ、暫らく考へてさては、向ひの上下やどに松葉屋有助が事であ

【三一】

らう、松葉もあり刺すほどにといふ、いやそれではござらぬ、さてはかゞみ屋はりみのかみかと問ふに、それでもござらぬ、まつとさつく刺すものじやと、いふ今おもひつけた、伊賀屋の八兵衛かといへば、それ〳〵といふて尋ね逢ふた。（鹿の巻筆）

大家の源兵衛さん

虚ろ七「夫だつて只楯籠つたばかりだちのを、へた郎「楯籠つたとつて穢ねへやイ、茶め吉「チョッやかましい、百成野郎だぞと、不生無生に手を洗ひ、此方へ來れば、喜次郎「ハ、アとう〳〵城から出かけたノ、虚ろ「夫りやア宜が、茶め公、おめへの引摺倒した男は、此處の

長家の家主さまだとヨ、下太郎と二人で詫事をいつて濟しては來たけれども、お前も無言て居ちや能ねへ、喜次さんに連て往て貰て、あやまつて來なせへ、喜次「エナニ夫ぢやアあの源兵衛さんの足をやらかしたのか、虚ろ「左樣さ、その源兵衛さんといふのさ、少しの事で辨慶さんだと強いけれどのウ、喜次「夫ぢやアなんぼ彼人が氣が宜とつて、打捨ちやア置ねへ、そして此處に遊んで居るから、猶の事一刻も早いが宜、サア一所に往て遣るから歩行なせへ、茶め「何樣してとんだつまらねへ事を云つたものだ、喜次「何故々々、茶め「夫だといつて、敵の城地へ踏こんで、萬一和議の破れた日にやア、帷幕のうちから伏勢が起つたり、城門の外に落し穴が有たりして見なせへ、

阿修羅王へ獅子奮ぢんの冠を着せ悪鬼羅刹へ三面六臂の鬼神をしんにふに掛たつて、「敵は大勢味方は一人たのむ、お前は二心といふのだものヲ、防禦の方術があるめへぢやアねへか、のら」「ナニサ〳〵敵城へ踏こんで事破るゝに及んだら、豫ては腰に用意の山八烟草の煙りをあげるが宜、夫を相圖に、味方の貧勢貧おどしの鎧を取て、肩になげかけ貧の鍬方、火の車の前立、もの打たるくる獅子頭の兜を猪首に着なし、困せ丸と號けたる難澁代の太刀を横へ、借金の利息高の羽に矧たる、云延三年竹の征矢を無理のごとく負做し借用證文の加印、五つ張の強弓を、欲の皮の鷲掴みに握り、家の前の痰大鹿毛へぽんくら置てのそりと打乗、嘘八百人の貧卒を、前後左右に引したがへ、「眠氣さま誌」大賣出しと書たる大旗を、青柳橋の朝嵐に翩飜とひるがへし、案内知たる路次の細道、敷連ねたる溝板を、勇みにいさんで、踏轟かし、大手の門の格子先、雨だれ落の堀際までひら〳〵と推寄せたりと、却合にかゝる、高調子、側にありたる年玉の萬歳扇をひろい取、火鉢のふちを敲きたてる折から、表

が瓦落理と明故、喜次「サア〳〵お肴のお客さまがおいでなすつた、茶め「お肴のお客さまたア誰だ〳〵、のら「飛八か跋助のうちサ、茶め「左様かそんなら一ばん驚かして遣るべゑと云ッ、立て、這入口の障子の蔭にかくれてゐるとは知らず、風呂の中にて茶め吉に引たをされし家主の源兵衛、此表をとほりかゝり、下太郎が扇をもつて敲き立しやべくるを聞き講談がはじまりたると思ひ、大の講釋好きゆゑ案内もなく上り來り、イヤご免なさいと障子をあける、顔を見て、喜次郎はじめみな〳〵飛八か跋助と思の外、茶め吉がことならんと察し、はつとして、喜次「コレハ〳〵源兵衛さんサア〳〵此方へと云ながら、蔭に隱れてねらつてゐる茶め吉に目まぜをもつて知らすれど、茶め吉は飛八か跋助のことを僞はつて、源兵衛さんといふならんと思へば、少しも構はず、彼源兵衛の敷居をまたぎはいらんとするそのとたんに、「ワアッと云ッ、妙な手をして飛いづれば、源兵衛は不意を打れて肝を潰し、「エ、冗談をと後へさがる、その顔を見て、茶め吉も仰天し、突出したる手を上げたり下たり、亦振まはしたり、「ワア、、ア、、わあうあゝんあゝんのわあゝわん〳〵わんきやん〳〵きやんと犬の吠る眞似をしながら、椽側へかけ出し、亦も雪陳へ逃こんだり、源兵衛は是を見てあつけにとられ空然として立て居る、四人のものは吹きだすばかりの可笑サを、しつかり奥齒で嚙しめて、しばらくグツグと云て居たるが、喜次郎は漸々笑ひを

飲こんで、「イヤ是は恐れいつた、今の男がお前さんとは知らず、跂助といふ朋友だと思つてとんだ麁相を御免なすつて下せへと云を聞いて、源兵衛「ハ、ア夫ではその跂助さんの爲には、私が次信で、君のお馬の矢表へ、駒をかけ居立ふさがり、かね、虚ろ「是は茶め吉がなんぼ平氣でも、少々のり經であつたらう、喜次「何かとんだ檀の浦でお氣の毒さまで御座います、源兵衛「それは宜が、お講釋がはじまつて居た御樣子故、私もお聞申さうと思つて上つたのだから、サア お構ひなくお遣なすつて下せへ、喜次「ハ、アアイエ講釋をお聞なさるのは御尤だが、全く左樣では御ぜへやせん、アノ茶目吉を、お前さんのお宅へ倍禮につれて出樣とぞんじて、其ことをはなして居たところ、虚ろ「すると茶目吉が、お前さんのお家へ參つて、堪忍して下さらねへ日には、大變だとまうす、と此下太郎が、へた「左樣々々嘘をいへば、八百本のあやまり證文を、青柳橋の朝嵐にひるがへし、貧の鍬形はおろか、家の前の痩犬をかげまに賣つても、自己が中へはいつて、倍禮てやるからトすゝめて居たところで御座います、源兵衛「ハ、ア夫ではお講釋ではなくて、仲人にはいらるといふ御相談かエ、何樣いふ理屈か知らないが、町内うちのことならば、及ずながら私も口をそへて上ませうか、喜次「ナニサ貴君へ倍禮につれて參らうといふので御座います、源兵衛「フウム お長屋の行事は、今月はお前さんか、ヤレ〳〵御苦勞千ばんナ、喜次「ナニサ長屋うち

のことでは御座いません、先刻湯の中でおまへさんに、失禮をいたしたのは、今亦人違ひでお前さんを驚かした男で御座いますから、その人物を倍禮に、源兵衛「ハ、ア成る程、イヤ夫れならば別段御挨拶にはおよばない、風呂ぢうでは、何本もある足だものう、生憎つかまつたのが此方の無調法、時にとつての不仕合トまうすものだと此源兵衛もお心よしと見えて、何事も氣に留めぬ樣子を、茶め吉は雪陳の中にて窺ひすまし、六ケ敷こともあるまじと、高をくゝり、頓てのそりのそり出來り、源兵衛が前にもぢ〳〵とかしこまり「是はお家主さま、先達は洗湯で御失禮つかまつりました、ナニサ、アノ彫物だらけな野郎が、餘りりきみやアがるから、すんぼらしいめ

に合して遣うとぞんじた所が、ツイお前さんの足をつかまへて引張やした、全体お前さんの足は、大造なお毛がお生なすつてお在なさる、彼御樣子では、東埔塞などをいくらめしあがつても、お氣づかい御座いません、何卒失禮のところは、眞平御免なすつて下さる樣にいたしたう御座ります、源兵衛「イエサ御挨拶では痛みいる、必さやう私が惡いところへ足を出して居たので、能なかつた、出る足人にひかるゝのたとへ、サア〳〵お構ひなく雪陳へおはいんなすつてお在なさい、左樣なら喜次さんお講釋が有のだと思つて、大きにお邪魔をした、何方も澤山お咄しなさいと云ツ、、表へ出て行。茶め「べらばうに氣の宜家主てきだのウ、喜次「ア、見えてもなか〳〵の通人

サ、茶め「道理で足にいかいこと髭が生て居たッけ、へた「夫は宜が彼處のすみにある廣蓋の肴は、何樣したのだ、虚ろ「違へねへ自己も先刻から左樣おもつて居たが、出すものならさつさと、出して仕舞ばいゝ、冷く成せ、喜次「出すものだかひつこます物だか、自己にも譯らねへのだ、のら「モウ野郎どもは出て來さうなものだなア、何をしてゐやアがるか、人の咽をぐひ〳〵させやアがる、いつその事お施主に構はず、鍋妙喰れんげぎやう中の汁が、だゞぶだぶ〳〵とお絕をあげて仕舞ぢやねへか、へた「左樣サこいつア上て仕舞うが宜、夫でねへと、五人の亡者がうかび乘ると云ッ、、立て廣蓋を持いでんとすると、その折から、表の方にて大聲上、「御上酒のおいりイ 引「ドン〳〵オヒウ。テレ〳〵〳〵〳〵テレック〳〵テン〳〵〳〵テンと云ながら、跂助が片手には、一升樽片手に、突袖しながら、威張かへつて這入來る、此時裏口よりも障子引明、「御上酒のおいり引、ドン〳〵オヒウ。テン〳〵〳〵〳〵テルック〳〵テン〳〵〳〵〳〵と云ながら、飛八が片手には、一升樽片手は、突袖しながら、何か体をぎくしやくと、しやツちこ張せて入來る樣子、趣向ありげに見えければ喜次郎はじめ四人の者顔見合せて、ためらひ居るうち、跂助と飛八は、猶オヒウテン〳〵〳〵〳〵と云ながら、持たる酒樽を其處へさし置、はれ「偖上使なれば、上座御めんト申すところなれど、上酒の義に御座りますれば、上へはのぼらず、則是に居着まする

様に御座ります、飛八「跂助は上酒々々と申しますれば、私のは上酒では御座りません、誠にお麁酒玉のしるしまでに差上げます、喜次「是は有難ぞんじます、左様して何かいかめし氣な御容子なれど、御口上は夫でお仕舞に御座りまするか、跂飛「左様で御座ります、もはや皆に相成ました、虚ろ「御持参の樽のなかは、全くの御酒で御座りますか、飛八「左様で御座ります、只今四方の見世にて、一樽に付一朱を一ッ差出し、上端ぐろみ三十二文づりを取て買求めましたれば、酒かとぞんじまする様に御座ります、のら「シテその一朱は何様して面工をなさいましたか、今日はお下着が一まい御不足の様に思はれますが、若しや飛しでもなさりば致しませぬか、はれ「イエサあれも飛さうとぞんじた所が、裾まはしが損じましたれば、漸二朱と六百しか用だしぬと申します、茱め「夫はけしからぬ下直なこと、私の目利では百疋一朱がものは有と思はれます、へた「左様にむごい事をまうすなら、いつそのこと屑は御座いにお賣はらひのはうが、嵩がのぼりませう、飛八「ときに跂助どの、彼等はけしからぬ失禮を申すやつらでござる、もはや口をおきゝなさるナ、はれ「左様々々夫がよろしく御座る、イヤナニ喜次郎どの、先刻鳥花やへ申付、山海の珍味を差上置たるはづ、定て参つてござらうナ、喜次「如何にも先刻参りたれど、是なら四人の者どもが、こと〴〵く喰ひしめ、入物ばかりは殘し置ましたる様にござります、飛八「エ正眞か、はれ「いけ

ねへせ〳〵しどい事をしやアがつたと立にかゝれば、喜次郎が「ト云て驚ろかしたる迄のこと、サア〳〵意地きたなしが執念の、かゝつた廣蓋を出したりだしたり、虚ろ「ヲツト承知だ、茶め「運べナア引、八イ里は、馬アでも越すがすナア引、エ、はッはやつこりやどつこい、重いぞ〳〵、へた「エ、イそれ傾てもつと飜れるは、のら「鍋は冷たから、火鉢へ掛るてとゝしやうと、是より七人打圓居、飲ほどに喰ほどに、跂助飛八が持きたりし二樽は、たちまち枕をならべて、板の間の隅にころげ、廣蓋の上には入物ばかり空然たり、喜次「既に先刻この亂軍に成うといふ所を、大愚にさゝえられ、酒戰なかばで終つたのだから、斯見えても重詰ばかりぢやアねへ、いざと

云ば持出す積りで、肴の用意はして有るのだと戸棚の中より二種三種のものを取出し、是は吸もの是は鍋と、直にしかける肴の後釜、酒宴ます〳〵盛にして、いつはつべきとも見えざりけり、跂「時に明後日は初卯といふのだから、連中一同で押出しちやアどうだらう、のら「宜かるべしよかるべしダ、茶め「亦婦人どもに惚られやうといふのか、虚ろ「ヲツト自己といふ好男子が、往から左樣はいかねへ、へた「エ、イ亦凸凹どもがいがみ合のか、飛「陸から押うか船で往うか、のら「陸にせよ船にもあれ、七偏人とも云るべきものが、只往といふ法は有めへ、はれ「なんの只往ものか、人々に何程でも面工をするが宜ワサ、のら「エ、イ釋らねへ只は往れめへといふのは、何か

趣向をせざア成めへといふ事だワ、はれ「詫て行ば吸筒華美にやれば藝者をめしつれるのサ、のら「夫はサ通例の人のする事だワ、左様でなく何かサ面白趣向が、ヲツト思ひだしたアノ池の端の和次さんの連中を見た様なことを遣てへのだ、茶め「人を荷うといふのか、べた「荷ぐのならホイ駕籠の連中だらう、エ、イ無言てゐろイ、茶め「茶番といふやつで往くのか、のら「左様サその茶番サ、喜次「夫れなら極面白い節があるぜ、はれ「何のお前の知恵でろくなものが出來るものか、喜次「左様いふけれど、是ればかりは年來考がえておいたから、眞にどつト請る積りのだ、マア彼様いふ趣向ヨ、一寸聞きねへ、ホイ紙數がみんなに成つたか、嗚呼惜しいけれども仕方がねへナア。

女夫喧嘩犬も喰はぬ

男「治兵衛さん、ほつて置いてお呉んなされ、こゝなどたふくめ、おれが勝手におれが錢つかふのじや、我が世話になやせんは、きよろ〳〵とサア出てうせ猿松め、か〳〵「ア、出ていかいでナ、こんな内に居たい事はない、サア出て行くが、私の着物皆こゝい出してお呉れ、あんまり、ぼん〳〵いひな、男なら男の樣に、かけの斷りや米買錢のつもりをお前がして、節季に逃げあるかぬやうしてお置き、甲斐性なしのへぼくちやをとこ、ぼん〳〵いひな、

中に立柱「これ〳〵モウよいかな、これはまた困つた物じや、太兵衛

もわるい、お内儀もひつこい、どちらも尤じや、モウ止んか、サア宜かな、分つてある、二人がさういふてくれるとおれや去にも去れず、是見てくれ、裾が柱に成る。

犬「何じや、又初まつた、あんな事ぬかしては、おれに喰そと思ふて、おたの申します、又中なをりするつもりじや、ドレ門へでも行きましよう。（臍の宿替）

武士の嗜の錆刀

ハイホウ〳〵脇へよれ〳〵といふ所を聞ぬふりで供を割る故若黨が捕へて突戻せば悪口する故、もう堪忍かと抜放す若黨の刀が赤錆

故、旦那が見附て、平生の嗜が悪いから耻をかくドレ鎗をと取て抜た所が同く眞赤、コレ見ろ嗜でもこの通りだ。（蝶夫婦）

梅法師は昔の皺

正直は一旦の依估にあらずとか、や、ずんと孝行にてなみだもろき人、振舞にゆかれけるとき、平皿なる筍羹をみて、箸をからりとすて、涙をはら〳〵とこぼされければ、亭主きもをつぶして、これは何となされたといへば、あの梅干を見まし

たれば、死なれた母じや人のことがおもひだされて、なげきまする
といふた。（作者未詳）

蚤の三番叟

上を學ぶ下とかや、さる屋敷の中間部屋にて草履取のちよこ内扇にて拍子を打つて、いやあは〳〵といふを、門番のづゝ平といふおやぢ、何やら面白さうな事をするなといへば、ちよこ内、上がたには能をなされて慰ましやるが、こちとは蚤をとらまへて、三番叟を蹈ませて見るといふ、門番つく〴〵見て、さても面白いことかなと思ひ部屋へかへり、何かは知らず一疋とらまへ、口笛を吹き扇拍子に

て畳をたゝきまはしけるとき、傍輩の中間來り、おやぢ何の眞似をするといへば、いや蚤に三番叟を蹈まするが、とぶやらはねるやら、目がかすんで太夫殿の舞ぶりが見えかぬる、よい目で見やれ、よくまやるかといふ、いやおやぢ、まひはせぬず、これは役者が、かはつて虱太夫じや。（作者未詳）

饅頭を喰はぬ土地

隨分妙な所もあつたものだ、「橘庵漫筆」といふ書に左の如く記してある

天王寺村（攝津國）は本朝三大村にして、凡そ生作とも萬石に滿る處なり故に月

數千軒なり、尤都會に續きたるゆへにて、然るに天王寺村はまんぢうを嫌ひしと云へり、解迨まんぢうを製るもの有ても蒸すときは蒸籠より腐りて出ると云傳ふ：

……

としてあるが、そも〳〵饅頭の起原といふのは、左程に古いものではない、その歴史といふのは「群談採餘」といふ書に、諸葛孔明、猛獲を征し、凱る日瀘水に至つて風濤あらく、渡るとあたはず、此時にのぞんで假に人の頭に比して羊豚の肉を麵に和して饅頭と云ふものを作り、其怨鬼を祭る、夫より遂に風やみ、浪靜まりついに渡ることを得たり、饅頭の名こゝに始るとしてある、それから日本に傳へられたとは、「饅頭三十番合」といふ書に左の如く記載てある

洛建仁寺二世龍山と共に林淨因と云ふ者宋に入て曆應四年に歸朝す、かの淨因南都（大和國奈良）に止つて饅頭を造り業とす、是をならまんぢうと云、是我朝にての始にして、後淨因林氏を改めて鹽瀨と號す、京烏丸鹽瀨も其類家なるべし、よつて日本第一ばん本まんぢう所としるしぬ、夫より諸國にひろまりとしてあるが、右の歴應年間（紀元九百九十八年）といふのは光明帝の御時世であるから現今より五百年許り以前のことで、聖德太師の御時世とは大變な差である。

甲「盲人六十名が江の島へ遠足會を催すとよ　乙「それだらう讀本に杖を曳く者殊に多しとあるのは

布海苔の代りに疊鰯

かみさん大根を一本下され、大根はムりませぬ、と切口上で云、亭主奥より出で、コレお前は今迄御屋敷につとめたから商の仕様を知らぬは尤もじやが賣切ッた物ならばそれはムりませぬがこれではお間に合ひますまいかと言へばそれに付いて外の物も賣るとがある、挨拶がかんじんじや、アイずゐぶん心得ましたといふ所へ、かみさん長芋を下さい、ハイ長芋はきれましたがつくね芋では如何でムります、長芋がなくばつく芋で間に合せませうと買つて行又門口へ、モシ山葵をくださいと言ふて來る、ハイ山葵はきれましたが生

姜では如何てムります、ム、生姜ではちとかゆひがせうことがない間に合はして置けとこれも買て行く、亭主、それ見やれ人に無理はない物のいひやうで買ッて行くわサ何時でもさう氣を利かせたがいゝと言ふ所へ、モシかみさん布海苔を一枚くんなさいと言へば、ハイ布海苔はきれましたがたゝみ鰯では如何でムります。（言葉の花）

下手な相手のない不自由

長雨の爲め川留に遇ひ宿屋住ひの退屈さ、主人見兼ねて、お客樣碁でもお打ちなさいませぬかと言へば、フ、ン、此の土地にも碁を打つ者があるかなとの挨拶、亭主むかッとしたれど、それはとてもお

相手にはなりますまいけれど御指南あそばす氣でと、二三人呼むで打せけるに、いづれも上手にて、客はぺた〳〵との敗北。やれ〳〵小敵と見てとんだしくじりなんと御亭主あれより弱い人は有るまいかと兜をぬげば「亭主」左樣でムりますあの人達より下手なのと言ツてはムりませぬなと言ふに、「客」さて〳〵不自由な所だ。（作者未詳）

易者「手相學者のベリー氏は五圓の見料を取ても商賣にならぬとよ　小兒「下手だネーお父さんなんか見料五錢だけれど商賣になるネー

木ではなく〳〵る

「イヤお出たか、又おまへ所の息子のとか、モウ勝手にするがよい、どちら道一ぺん燒いてこんといかんよって、まアそのつもりでなされ、ハイさよなら、まア一ぷく喫まずと早いかんか、わしは此通りに木で鼻く〳〵つてゐるゆへ、手がはなされん、そちらでどふなと相談しておくれ、ハイ。（臍の宿替）

宿賃忘れの茗荷

旅籠屋の女房亭主に向ひ、今夜泊ッた客の行季は餘程のものと見へるどうぞ忘れて行ば宜がと云ふに亭主、ヲヽ、宜い工風がある何でもむやみに茗荷を喰せて見樣と汁も菜も皆茗荷を澤山入てもてなしける故翌朝客の立しあとにて、大方忘れて行ッたらうに座敷には何もなし、さて〳〵茗荷も利ぬと云へば亭主、利いた〳〵、ソリや何を、ヲヽ、サ旅籠代を忘れて行た。（輕口　浮瓢箪）

通りすがりの男の唄を、嬲り返して茶摘唄（賤の家）

遠眼鏡へ耳をおしつける

御物見から遠眼鏡のおたのしみ、あれなる塔はいづくしや。ヘイ觀音でムります、こちらの鳥井が三圍の稲荷この通を御覽じませ三又の新地でムります、殿よく〳〵御覽最中美くしい娘と行平ともいひそうな若いものがひたりと行合ひ、なにやら懇話の躰殿樣たまりかね遠眼鏡へ耳をおしつける。（作者未詳）

膝の疲れに短夜更けて、長い夢見た肘枕（結城鷲雪）

合せ鏡に見る嬉しさよ、簪す牡丹の裏表（中田蛙骨）

望遠鏡の黒燒

女房「旦那何を持つて入らつしやるの、旦那「此物かい、女「ハア、旦「此りやア何だヨ今度新發明の藥なんだがね、餘程面白藥で何處でも好な處が見られるんだ、和女京都が見たいと云つたが京都を見せて進げやうか、女「見度いことねへ、旦「鳥渡此藥を蒔くと其處が見られるんだが、京都の何處が見たい、女「妾は京都の嵐山が見たいは、旦「あらし山の藥が有れば好有たゝ、……あらし山此品だ……見て御出でヨ、フーッ（吹く）ソーラ何うだ出たらう、女「ヲ、美景だ事河が有りますねへ、旦「是が桂川と云ふ河の上流さ、女「那處に

橋が、旦「渡月橋サ、女「筏が流れて居ますねへ、ヲ、好い景色だことアラ消ちまつた、旦「藥だから直に消るよ、今度は何が見たい、女「妾は奈良が見度う御座います、旦「猿澤の池……ソーラフーッ（吹く）出たらう、此處が猿澤の池、那れが衣掛け柳、那の下にあるのが惠比壽の宮、……此方が十三鐘さ、女「向ふに鳥度見える鳥居は、旦「春日樣の一の鳥居、……女「好い景色だこと、……アラ消ちまつた直に消えますねへ、旦「藥りだから直に消るヨ、今度は何が見度い女「大坂を見せて頂戴な、旦「大坂……フーッ（吹く）出たらう、女「ハア……ラー好いこと、旦「那處が八軒屋だ、……女「好い處ねへ、お城が見えるじやア有りませんか、旦「那れが大坂のお城だ、

女「河が大變に見えることねへ、然して橋が、旦「那の橋は天神橋さ突當りに見えるのが天滿天神樣の鳥居だ、アレ消えちまいました、モー少と長く見られる工夫は有りませんかね、旦「藥りだから詮方が無いヨ、……フーッ（吹き）今度は大阪の芝居の處だヨ、女「アラ好いこと旦那、那の芝居は、……旦「那れが惠比壽座、……那れが中の芝居、……此れが角の芝居、女「横町にも芝居が、旦「ナニ那ありア千日前の見世物だ、女「然うですか、……アッ消ちまいましたヨ、直に消えますねへ何てへ藥でせう、旦「是は望遠鏡の黑燒だ、」

（楠家）

江戸者と上方者の言葉爭ひ

かみがたすぢの女、ずんぐりとした風俗、色白にてくちびるあつく、目のふちは紅ぼかし、口べにくろびかりに濃くぬり、ふといかうがいを白紙にてくるくるとまきたるは、湯氣にてべつかうのそらぬためなり。こゑにて、かみかた「於山さん、ゑらう寒いな、何じやトヽモ

ウ此間わ、お腹の工合がわるうて、夜ざりごとに腹痛でづゝないはいな、それぢやさかい風呂になと入つて温ためてこまそと思ふて、なアんぼも入つてじやはいな、於山さんあれを見イ、お家さんの傍に立つて居なます嬰兒さんを見イな、ありや何色じやしらん。於山「あれかエ、あれは紅かけ花色といふのさ、かみ「いつかう能う染てじやなア。山「薄紫といふやうなあんばいでいきだねへ。かみ「いつかう酔じや。こちや、江戸むらさきなら大好〳〵。こちや、あないなあのやうなきと云うこと着物がしてほしいわエ。於山さんあつちや向んか。山「ながしておくれか。夫はおはゞかりだね。かみ「なんのいナ。デモ能う肥てじやな。山「いやよ太つちやうわしみ〳〵否だ、酢でも呑んで痩たいよ。かみ「なんのマア肥たが能じやないかな。山「それでもおまへほつそりすうわり柳腰と云ふじやアねへか。かみ「かいな。こちやまた風負せいで能かと思ふに。私など走競せうなら横にねて轉る方がやつと速じや。山「ハヽヽモウ四を打つたかね。かみ「何たひじやいな。つウつと最前打てじや。最やんがて晝じやがな。山「さうかへ。日は短いネエ。かみ「さいな。これから行だらわし所へ於出で飯食んか。上つ風に丸を料理して食て見たいと千度いふて、トトモウ内のが耳潰してじやつたが、今日はどうしてやら丸焚て食はそと此様に云てじやさかい。晝は丸じや。山「丸とは何だへ。かみ「御當地でいふ鼈じやがな。おまへも食て見い。山「ヲヤいやよ、おつかねへ。鼈な

んざア。見るもいや。丸を焚くといひなさるから、麥飯かと思つたら鼈かへ。ヲヽ氣味のわりい。江戸じやアね、鼈をしやれて蓋といひやすよ。かみ「何じや蓋。あはらしい。蓋とはマア何のこちやいな。山「蓋の樣だから蓋さ。上方の丸とはなぜだねへ。かみ「甲が丸いさかい丸じやわいな。山「そんならどつちも五分〳〵のこぢつけだね。かみ「さいな。御當地の鼈煮〳〵と云ふはな、どないな仕方じやと思ふたらあほらしいてマア吸物じや無て、上でいふ轉熬じやさかい、塩が辛うてトヽやくたいじや。上の拵方は又あないな、もみない と云ふこともんじやない、第一が薄したじで吸物じやさかい、酒の下酒になどせうものならいつかう能じや。こちや最う大

好大好。鰻なども御當地のは和いばかりで、もみないがな。上の鰻といふたらまアどないなもんじやい。名高い所がマア京で上の生洲な。大阪で大正ナ。その外に川魚屋もまだまあ多とあれどナ。玉といふたら的等じや、何じやろとマア鐵串にさして燒じやな。その燒た跡で能程づヽに切てな。平に入てきつしりと蓋して出すさかいに、なんぼでもさめるといふ案じがないわいな。山「江戸じやアそんなけちな事は流行らねへのさ。江戸前の蒲燒はぽつぽと湯氣の立つのを血へならべて出す、たべるうちにさめたらその儘置てお代りの燒立をたべるが江戸子さ。さめると猫に持行て遣うと竹の皮へ包んで歸る人は、よつぽど勘定高い人さ。かみ「夫がマア何で江戸子じや

な。物の廢にならんやうにしてこそ自慢したが能はいな。いしこらしう江戸子じや何たら角たら云ふても。上の者の目から見ては、トヽやくたいじやがな。自慢らしういふことが皆へこたこじやにようつて、江戸つ子はへげたれじやといふはいな。山「へげたれでも能のさ、江戸ッ子のありがたさには。生れ落から死まで、生れた土地を一寸も離れねへよ。アイおめへがたのやうに京でうまれて大阪に住つたり、さまゞにまごつき廻つても、あげくのはてはありがたいお江戸だから、けふまで暮してゐるじやアねへかノ。夫だからおまへ方の事を上方せへろくと云ふはな。かみ「ざいろくとは何のこつちやろ。山「さいろくト。かみ「さいろくとはなんのこつちやへ。山「しれずばいヽわな。かみ「關東べいがさいろくをぜいろくとけたいな詞つきじやなア、御慮外もおりよげへ、觀音さまもかんのんさまなんのこつちやろな。さうだから斯だからト、あのまあからとはなんじやア。山「から」だから「から」さ。ゆゑといふことよ。そしてまた上方の「さかい」とはなんだへ。かみ「さかい」とはな。物の境ひ目じやハ。物の限る所が境じやによつて、さうじやさかい、斯うした境と云ふのぢやはいな。山「そんならいはうかへ。江戸詞の「から」をわらいなさるが百人一首の歌に何とある云。かみ「ソレ〳〵最う百人一首じやアは、首じやない百人一首じやはいな。まだまア「しやくにんし」といはで賴母しいな。山「そりやアわたしが云損にもしろさ。

かみ「そこねへじやない云損ひじやあらう聞づらいな。芝居など見るに今が最期だ觀念何たらいふたり、大願成就添けねへ、何の角のいふて萬歳の才藏のとぎつぱな男が云ふてじやが。ひかり人のないさかい、よう濟んである。山「そりやゝ上方もわるいゝ。ひかり人ッサひかるとは稲妻かへ、おつだネエ。江戸では叱るといふのさ。アイそんな片言は申しません。かみ「ぎつぱりひかる、なるほどこりや私が誤た。そしたら其の百人一首は何のこちやエ。山「から」といふ詞の譯さ。能お聞よ。百人一首の歌に文屋康秀吹からに秋の草木のしほるればトあるよ。ソレ吹からネ。よしかへ。吹ゆるにといふことを吹からに。なんぼ上方でさかいゝと云ふても吹さかい秋の草木のしほるればとは詠はいたしやせん。かみ「なる程さう聞きやおまへのがほんまに尤らしいが。ハテ云ひや何でもいはれるはいな。山「大願成就でもなんでも利口をじこうといつたり立派をぎつぱ、狐をけつねといふより能のさ。五音相通とか何とかゝかなつてゐるからむりじやアねへと此中も博識な人がおはなしだつけ、延引だの觀音だのと、あいうえをの上へむの字が乗れば五音相通で恩愛觀音延引善惡などといふものだと、能敎へなすつたら、今度おめへが江戸詞を笑つたら、一番し、てやらうと思つて待つてゐたはいな。かみ「さうかいな。そんならまアかんのんも能ハト、からも能ハト、扨また關東べいじや、どうしべい斯しべい行べい歸るべいと

は、扨見とうむないナア。山「それもネ萬葉集とやらその外神さまの時分の本にネ、べい〳〵詞があるとさ。可とは可しといふことで行べい歸へるべいは、可行可歸といふ詞で、いまでも萬葉とやらの歌よみは、べいことばを遣ふさうさ。このことも一緒に聞いて置いて内へ書つけて置いたから、その歌やことばを來て見なさへ。鄙言の何ちふことだの角ちふことだのといふのも、ちうとは「といふ」といふ詞を詰たので古い詞だから頼もしいとお云ひだよ。かみ「なんのいな。べい〳〵詞が何で譯があろぞいナ。山「譯がなくつてさ。うそならわつちが内へ來て書付を見なせへ。かみ「ハアちと見よかいナ、何なと賭にせうかい。私がまけたらナ。醧なと大福餅なと立

ちよはひナ、お前又何なと立さんせ。山「立てるとはへ。かみ「振舞の事ぢや。山「おごるのか。かみ「さいな。山「ツヽわつちが負たら鰻を貳朱ばづまう。かみ「こりや能はいな。山「アいた〳〵〳〵ヲヽいたいよ、おめへはまア調子に乘つて脊中を痛くおこすりだよ、モウよいよ。かみ「ハヽヽ拍子にかゝつてヲヽしんど。山「サアおまへの脊中をお出し。かみ「又遺趣かへしにゑらいことすまいぞや。是どうじやいな。お山さん。アいたアいたア毒性なお方ア。いつこ面倒なら放ておかんせ。アいたいた何しいじやいな。痛さがたまらんはいナ。灸があるさかい味能うながしいな。アいたアいた〳〵〳〵。

人の事をいつて自分も忘れた

長老客僧にむかひ、さて此ほどは久で貴僧も御上京の由、さやうでムります、何んぞめづらしい事はなかッたかな、殊の外めづらしい事がムりました、夫はいかやうな事ぢやぞ、十歳ばかりの子に十念を授けましたが辞世をよみました、夫はめずらしい不便なことであッたその歌は、ア、なんとやらいふ歌でムりました、お忘れなされたか、覺えて居ましたがトント忘れました、沙門の物を忘れて悟りの道がどうなるものぞチトおたしなみなされ貴僧のやうな人が釋尊のお弟子にもあッて其人の名をア、なんとやら言いましたワイ。（安永版　咄角力）

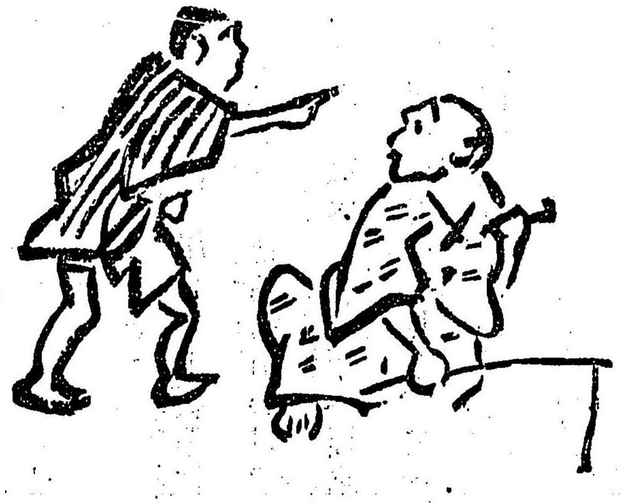
急病

九ツ過の寢入りはな、トン〳〵〳〵誰じやイヤ伊勢屋から御親造樣が癪が引付て目を取詰めました、急に〳〵「南無三寶羽織引かけ、紐そこ〳〵にかけていで〳〵、ズツトはいれば、家内は上を下へ醫者どの寢起のうろたへ眼で、行なりに下女の手を取て脈を見る、ア、ヤ私ではござりませぬ、「ハテこんな時に誰彼の差別はないてや。

（作者未詳）

釣り好

深川の木場の邊で一心ふらん岡釣をしている所へ。もしこゝへ二十四五の男は參りませぬかといへば。アイ來ました。島の羽織着ておりまーたか。アイ羽おりを着ていました。なんぞ喰ひながらきましたか。アイくひます〳〵。アノ女のつれがありましたか。アイありました。女も若



い娘でございます。アイ左樣〳〵ホイ逃たはい。どつちい逃げました。イヱ大きな鮒を。イヤサ其人はどこへ參りました。といへば。ヱ何をいゝなさる。（世事廣丸）

看病に往て病人に茶を汲ませる

どうだ八てめへ大分あんばいがわるいさうだ一人てさびしからうと思ツて言合せて今宵は看病に來た何ぞ喰ひてへものはねへか何でも望むだが宜こしらへてやらう。ヤア友達といふものア難有てへもんだ三人共とまツて呉れるのか、ヲヽサ其積りだ樂でも白湯でものみたかアさういふが宜と宵のうちはにぎやかに酒など飲で居たりける

が夜更てはころ〳〵と皆寝て仕舞ふ、病人目をさまして茶でも湯でもひとつくんなと起せどもおきず詮方なく病人這ひ出れば一人目をさまして、ヲヽ八なんだ、ウヽ茶がのみてへからと火鉢の傍へ這ひよれば、ついでにおれにも汲むで呉れやれ。（一九作　書名未詳）

花車岩井扇

三下り曳けや曳け〳〵姿も霜の花車、合白紅の染手綱、合しやんと着なした濃い風折の、烏帽子狩衣男舞。今日今様の壽を、祝ひ奏づる三つ扇、其の舞扇手もたゆく、げに旃檀の二葉ぶり。（此の間舞）冬の半ばに山里を見渡せば、合梢は霜か雪の花、合冬至の梅の色盛、合薫りゆかしき花の釉、合彼方へひとり、合此方へひとり、合櫻に紛ふ雪景色。初戀の人目恥し花紅葉、忍ぶの山の下紅葉、薄いはいやよ戀（濃い）衣、合結ぶ赤繩は神さんの、御仲人ではないかいな。今宵逢ふとの合闇は何んぞ合妻戸叩かば誰れともいはで、合明けて霜夜の睦言も、唯心なき鳥鐘に、いと思の増鏡、合せ鏡の比翼絞。

二下り　玉垂の内やゆかしき御所車、ソレエ〳〵、合筆に思の文車、返事美し花車、くるり〳〵くるり〳〵〳〵花車「積る夜の通ひ車や雪車、ソレエ〳〵合忍ぶ車の君と我、扇（逢ふ）車や戀車、合くるりくるりくるり〳〵〳〵戀車。しほらしや。振り（降）こめ〳〵初雪の合中に見事な花の槍、合振りの袂に戀風が合よれつもつれつ合ちら〳〵〳〵と。合さんさ時雨に濕れ〳〵初めて。合揃ふ槍の手花の山、飾り立てたる伊達なとりなり。合唯何時までも此の舞臺、かはらぬ花の顔見世や所繁昌かはらじと、賑ふ御代の里神樂、千秋萬歲萬々歲と「豊にこそは舞ひ納む。（江戸長唄）

聖人に夢なし

世中の人の心の仇花、色に移り易き男あり、子のある間といへど、女房はことに嫉妬深く、これを氣にして勞瘵となり、ついに世を去りければ、閨の内ものさびしく、子供の行末も不便なりと、後妻を呼び入しに、ふるき妻とかはりて、夫の目をかくる下女腰元には、ことに睦ましく情けを加へ、まゝ子といへど身をわけたる如くにいとをしへ深く、よろづ氣をつけて育てければ、世間からも牛を馬に乗り替へたなどゝ賞めけり、或時心易き友、かの夫にいふやう、貴

様は仕合じや、今度の内方は賢女の沙汰がある、唐は知らぬこと日本にはない聖人といふものじやと、追從をいひければ、夫聞いて、されば、身どもゝさう思ひまして、此中もうけたまはれば、ちいさい時から曾て夢を見ぬといひまするといふた。（作者未詳）

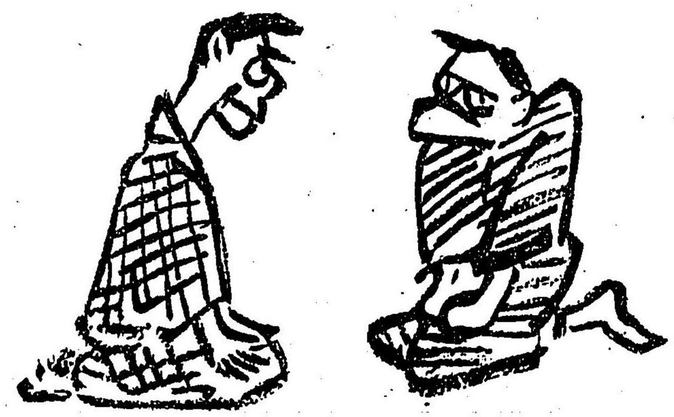
椽の下から這出る上戸

三國一じや婿に取りすまいたと、大杯で重なりければ、一人の上戸正体なく醉つぶれ、座にたまらず、そろりとぬけてつぼの内へ出けるが、足立たざれば、そのまゝ椽の下に隱れ臥す、亭主も相客もかの人を尋ぬれども見えず、不思議やと勝手を詮議すれども、歸りた

まはぬといふ、さればこそつぼの椽の下らしや、それ棹か熊手にて探し出せ、最早酒も取ぎはなれば、ぜひまひとつと口々にいふ、中に下戸なるもの、ことのほか大酒にておいたみと見えましたほどに、其分にて盃をおつもりと立つてとめければ、しからばとて千秋樂を謠ひ、盃をさむるとき、かの人ちとさめぎはになり、のこりおほく思ひ、椽の下よりはひ出ていふ、しばらく下界へあまくだり、人の心をためして見るに、醉くたびれてかくれたるものを、棹か熊手で探し出し、ま一つ飲ませたいとおつしやるお方樣もあるに、最早いたみさうな、ひらに盃をおさめひと、ぬかす奴もあると、怨しさうにいふた。（作者未詳）

白眼競の會

今は昔にらめくらの會を催し角力の如く、東西に立わかれ、土俵へあがりにらみあひ、笑たる者は負と行事是をさだめる、扨だん〳〵に取あがり、大關になり、東大目玉〳〵。西は、まじめ顏〳〵と双方立向ひにらめる、しばらく勝負つかねば、水をのませ、それよりひじゆつをつくして、にらめて居るとだん〳〵目玉がいたくなるゆへ



両方の關取も手を出して目をいぢろふとすれば。見物からこすりはならねエぞ〳〵。（三　毛）

盜みをさめの辭世

盜人を捕へて殺さんとする時、ぬす人「しばらく待てたべ、辭世の歌をよみたいといふ、それは奇特な事じや、さあよめといふたれば、

かゝるときさこそいのちの惜からめ
　　兼てなき身と思ひしらずば

皆人聞いて、それは太田道灌が歌じやが、ぬす人「アイこれが一生の盜みをさめでござります。（作者未詳）

妹脊の鍄

父「金太歸つて來たら草紙を乾て置なくちやア往ねエぞ、言附られるまでは無皆なが先へ歸つたのに何を爲てエたんだ、

金太は上へ昇る時に俯屈んだので袂から母に貰ひました銀貨が轉がり出ました、

父「何んだ夫は……」

金「エー五十錢の銀貨ヨ」

父「銀貨を何うしたんだ」

金「貰つて來たんだ」

父「何處で」
金「何處でも宜いや本統に貰たんだョ」
父「本統に貰たつて何處て貰つたんだョ、エー何を何處で貰た」
金「何處でも宜いやナ本統に貰たんだつてエに」
父「誰も虚言だとも何とも云ねエや、本統に貰たら宜が呉た人にお禮を云なけりやアならねエから其人を云ひな」
金「貰たんだから宜いぢやアねエか」
父「金太ア其處へ座れ、……(白眼み付)コレ馬鹿ア云ちやア往ねへせ子供だからお使にでも往けば二錢か三錢呉れる人も有が五十錢の銀貨なんぞをポカ〳〵小供に呉れる者は無エ、サア小言は云ねエから

誰に貰つたか云ねエか、自己が、仕事に往度にチャンと汝に皆なの遣う丈の小遣を宛行て置のに云ねエか」
金「云ねエかたツて本統に貰たんだョ、呉れた人を云つちやア往ねへつて云たんだョ」
父「其樣な事を云奴が有るものか云ねエかウヌ、……云はなけりやア了簡が有る此玄能で頭を毆ぐるぞ」
と烈しく叱り付られメソ〳〵泣出し、
金「本統に貰たんだョ」
父「だからョ誰に貰たんだか云たツて宜しやアねエか」
金「然んなら云が先の阿母アに貰たんだョ」

父「ナニ先の阿母アが來たか」
金「先の阿母アッてツたら顔の色が變トエ」
父「止せ、何處で逢つた」
金「此先に前の家の裏の奥に居た糊屋の婆アさんが火事で以て燒て當地へ越して來ツて、其處の店先へ腰を掛けて阿母が咄しをしてエる處へ通たら、金太〳〵と呼で御膳を喰べさせて遣るが阿母アに逢たと云ちやア往ねエッて、先へ往て阿母アが待てるんだから鰻を食べて來ても宜か」
父「然んならば然うと云ふが宜いじやアねエか何んな打扮をして來た」

金「紋の附た着物を着てエた」
父「何處かへ嫁付た容子か」
金「ウーン、燒餅を燒なさんな、お屋敷に奉公してエるとヨ、氣心の知れない亭主を持のは忌だッて、俺に然云ふから阿母アの氣を引いて見たら些とは歸り度エやうな容子が有るやうだゼ」
父「生意氣な事を云な、……着物を着替る顔を洗ひな面ア眞黑だから」
と何の中にも外見で男の手一ツても洗濯物位ひは有ますから着物を着替へさせ出して遣つたが氣になるので跡から出掛て參り、
父「今日はお忙しう、……家の小兒のが女連で當家へ參つて居ます

か」

「ヘイお入來で御座います」

父「御免なセエまし、……オウ金太〳〵チョイと顔を貸して呉んな阿父だヨ」

と云ふ聲を聞付糊屋の婆さんが二階の昇り口から顔を出し、

婆「オヤ熊さんマアお昇んなさいましヨ誠にお久振りでハイ有難う、……何も變つた事は有ません和郎さんにも、……今和郎さんの處へ行うと思つて居ましたノ丁度宜い所だからお昇なさい、何も間の悪い事も何も有ませんヨ」

熊「間が悪くて昇れやア、……然うでげすが間が悪いねエ誠に何樣

も小供が頓だ御厄介になりました」

婆「然改まつちやア往ないヨ妾も三年振で金太ちやんに逢たんですが、お住さんが金太ちやんに御膳を喰べさせ度が一人では間が悪いから一緒にと云はれて妾も御馳走になつて居ますが、段々お住さんの容子を聞ました所が、お屋敷へ奉公をしてエるそうだが、和郎さんも二度目の容子が善無て男の手一ツで小供の世話アして居るより女親が傍に居るとまた違ふから何樣か元々になれるやうにと妾も心配して、チョイと和郎さんの處へ往て捻を戻そうと思ふんだが、小供が可愛んなら然うした方が此子の爲だヨ」

父「實は面目ねエ散々馬鹿ア遣つて無理に追出て今更歸つて呉とは

云ませんや、小供の爲にやア阿母が居れば夫に優した事は有ません
が、今更小生の口から歸て呉とは云ませんや」
婆「和郎さんが然云ふ了簡なら妾も嬉しい、……お住さん今お聞な
さる通りの譯で和女さんも此兒が可愛なら然おしなさいナ」
生「妾だつて何日まで奉公も出來ません漸々年は老し外に樂みは有
ません、只小供の手足の伸るの斗りが樂みなんですが、妾の方では
宜う御座いますが、妾のやうな無意氣のものですから歸つても熊さ
んの氣には入りません」
婆「氣に入るも入らないも無いじやア有りませんか、親子夫婦お互
に三年振りて一ッになると云ふのも、全く此兒が有るからで夫婦の

の中の小供は「カスガイ」だとねえ」
金「へエー自己ア「カスガイ」かエ道理で阿父が玄能で頭を打と云
た」（ろんば）

太々神樂の代りに金柑神樂

丁雅子供より合コレ竹松どんおいせ樣の太々をうつと。うまい物を
たんと喰とよ。ホンニか。そんなら龜吉どんおいらもぬけ參りをし
て。だいぐをうたふと。そこらの心ざしある人をたのみ。ろぎん
少々こしらへお師の名は聞およべば。なんなく山田のお師をたづね
て、お頼申ませう御師の手代出「どこからござつた。アイ江戸藏前

の伊勢やから參りました、太々をうちとうござります。コレハよふ御出、舊冬參つた時おはなしもなかつたが。存寄らぬ事。跡から大せい御出か。イヽエ私共二人ハテなといふ内。錢百文づゝ紙に包。モシ是で太々を打とふござります。ナニ太々を此子は氣がちがつたか。コレそつちの旦那の太々は五十兩ざつとして二十五兩だとんだ事をいふといへば。竹松どん。どうせふモシそんなら此百で。太々がならずばきんかんでも。（紫雄）

甲「乞食が餓死したとは感心ダ乙「ナゼ甲「職に倒れたのだもの

竹光の名刀

今はむかし神田邊を折助が酒によつて千鳥足を子供がはやして、エヽなまゐいやいべらぼうめと、笑ふを聞いてなんだなまゐいだ、うぬいつ酒をのませた、おれがすきでおれがのむにすいさんなやつだといふすいさんもすさまじい、折介やいのろまやいとはやす、何ぬかす眞二ツにするぞと、脇差にそりをうつと、ハアイうぬがどう切事がなるものだぬいて見ろ〳〵といふゆへ、こらへかねてひらりとぬけば竹光、それみやアがれそれて切る物か。ヘアイ〳〵と笑へば、何うぬら、とげを立てやるぞ。（砂邑亭文好）

但馬國の尻打ち

陰暦正月の十五日には同地津屋邊の村内の小兒等が集合して、各々藁縄にて橋木の形狀のものを拵へる、それを提へて新嫁を迎へし家に行きて嫁の尻を打つ、又家によりては嫁を打たれぬやうに匿す、けれども大概の家では菓子餅などを小兒等に與へて輕く打たせる、怠ふするとよき子を生むといふて祝ふ。

ぶせう者の寄合

田舍親仁都會へ出ての歸るさ、風呂敷包を脊負ひ懷手で堤づたひに來るに甚空腹になりければ包の中の握り飯出して喰はんと思へども折角懷手して居るにそれも面倒と思ひ居る向ふより、之も空腹らしき男菅笠をかぶり大きな口をあいて來りしかば定めて飢じき故ならんと思ひ、モシ〳〵旅のお方わしの包を下して握り飯を出しソシテ口へ入れて下さらば御禮心にあなたにも二ツ三ツは上げませうがといへば、「たび人」そんな手間が有る位なら此笠の紐を結びま

す。（咄角力）

一條もどり橋の化物の由來

いつの頃にかありけん、都もどり橋の邊に、夜な〳〵變化のものありと言ひ渡る事あり、茲に往者名ある武士その頃は世を憂さものに思ひて、洛中に徘徊して侍りしが、ゆたかなる餘慶にて今に所せまきさまなりしが此事を聞き、さるにても如何なるものぞ、見屈け侍らんと思ひ、或る夜彼の橋のほとりにざしきをうちて、妻女もろともに行つて、ひそかに待ちてぞゐられける、さるほどに常に立入し座頭のありけるが、其夜しも來りて殿はと問へば、しか〴〵の事といふ人多くては化物來らじとて、上下二三人しておはし侍る間、御伽に參られよかしと言ひければ、尤もの御事なりさらばとて、彼の座敷に行きぬ、某なゝめならず喜び、宵のほどは平家など語らせて慰みけるが夜更けて人しづまりぬれば、夫婦ながら殊の外に眠くなりて、化物見んこともなるまじきと、互に起し制するほどとてそあれ、後には性根を失ひ、よき心持ちにてうか〳〵と眠りけり、かゝる所に二人の中へ彼の座頭飛かゝり、長き手をさし伸べて頭を壓へける、男驚き得たりやかしこしと起上り、太刀に手を懸けんとすれども、網にかゝれるが如くにて、手足に搦り侍べるを、やう〳〵に押しくつろげ、相傳の來國光をもて拂ひ斬にぞしたりける、化物一刀斬ら

れて、少怯む所を、つづけざまに五刀刺してさて火をともし見給へば、手足は龍の如くにて、長さ一丈三尺五寸、頭は繪に書ける酒天童子の如くなり、是ぞ蜘蛛といふ虫の功を經て人を誑しけるなり、其後橋に肆して諸人に首を見せけるとぞ。（曾呂利物語）

謠好と薪屋

謠といふ物は五音に通じ、律呂の調子に節を付けたるものなれば、餘の音曲とは違ひ、天子將軍の御上覽にも入て、太平を舞うたう曲なれば、その心得にて心を落付、靜に謠ひなされ、サテ昨日の夜でござる、ウタヒ「其上一」とせ渡邊福島を出し時は、以の外の大風なりしを、我君御舟を出され、平家を亡したまひし事、今もつておなじ事をかし、急ぎ御舟を出すべし、（このとき表の戸を明けて）ヘイ御免、薪屋で御座ります、お拂ひをもらつて歸ります、ウタヒ、げにげに是は斷りなり、どうぞ今日はもらふていにます。（腑の宿替）

狸の腹皷

春の夜のしづかなるに、月の光さやけく、話の友もなければ、ひとり床柱により「去とも此人はと中音にうたひかくれば、しばしするとと障子越に、ポン〳〵とさしもえならぬ鼓の音、不思議には思ひながら、たへずうたへばます〳〵皷も調に乘つて打つ、だん〳〵面白

さに田村を互に張合ふて餘念なかりしが、いつの間にや、とんと皷を打やんだから、不思議に思ひ、そつと障子を明て見たれば、狸が腹を打破り、ヒイ〳〵。（作者未詳）

狐のお化と道中

彌次郎兵衛あまりに草臥れば先此所はづれの茶店に腰をかけたるに、あるじの婆々「アイ茶アまいりませ 彌「モシ赤坂まではもふ少しだのば」「アイたんだ十六丁おざるが、おまへひとりなら此宿にとまりしやりませ此さきの松原へは、わるひ狐が出おつて旅人衆がよく化され申は 彌「そりやア氣のねへはなしだしかし爰へとまりたくてもつれがさきへいつたからしかたがねへエ、きついこたアねへやらかしてくれふアイおせわ（トあくまゆ毛につばをつけながら行はるか向うにて狐の鳴代を置此所を立出行にくらさはくらし、うそきみ）ケン引〳〵 彌「ソリヤなきヤアがるはおのれ出て見ろぶち殺してくれふ（トりきみかへつて、たどり行に北八も先へかけわけ此所迄來りしがこれも、こゝへきつれが出るといふはなしを聞、もしも化されてはつまらぬと彌次郎をまち合せつれ立行んとおもひ土手にこしかけたばこのみゐたりけるがそれを見るより）北八「ヲイ〳〵 彌次さんか 彌「ヲヤ手めへなぜこゝにゐる 北「宿とりに、さきへいかうとおもつたが爰へはわるい狐が出るといふとだから一同にいかふと思つてまち合せた（トいふに彌次郎心づき、こいつ、きつれめが北八にばけたなとおもひければわざとこわみを見せず）彌「くそをくらへ 北「ヲヤおめへなにをいふそして腹がへつたらふ餅を買で來たからくひなせへ 彌「ばかアぬかせ馬糞がくらはれるものか 北「ハ、、、、おれだ

はな　彌「おれだもすさまじい北八にそのまゝだよく化やアがつた、ちくせうめ　北「アイタ、、、彌次さんコレやどうする　彌「どうするもんか、ぶちころすのだ（トうつかりした所をぐつと、つきたをして彌次郎そのうへ、のり懸りおさへる）北「あいたゝ　彌「いたかア性體をあらわせ〳〵　北「アレサ尻へ手をやつてどうする　彌「どふするもんか尻尾を出せだまずばこうする（ト三尺手ぬぐひをときだす八が手をうしろへまはしてしばる北八おがしくわざとしらばれて居るさ）彌「サア〳〵さきへたつてあるけ〳〵（ト北八をくゝりうしろからとらへておつたてゝあか坂のしゆくに、いたる早いづれのはたごやも、きやくをまめて、かどにたちいる女も見へず彌次郎はやどからむかひの人はもはや出そうなものとうろつく内）北「コウ彌次さんいゝかげんに解てくんな外聞のわるい人がきよろ〳〵見てわりいわな　彌「エ、、くそをくらへハア宿はどこだしらん　北「ナニおれはこゝにねるものをだれがさきへ、やどをとつておくものだ　彌「まだぬかしやがるちくせうめ（此内むかふよりくるやどやのおとこ）「あなたがた當宿おとまりではおぎりませぬか　彌「ささまむかひの人かやどや「ハイおさやでおぎります　彌「それ見たか此ばけぞこないめ（ト北八をつえにてひどくくらはせる）　北「アイタ、、、どふしやがる（やどやの男きもをつぶし）あなた方外のおつれさまはまだお跡でおぎりますか　彌「ナニもふわつちひとりさやどや「ハア夫では間違ました　私かたのおとまりは十人さまじやとうけたまはりました（ト此男はそう〳〵行過るまたあるはたごのやみせさきにて）ていしゆ「お泊かなもし（トかけよつてつかまへる）彌「イヤつれのものがさきへきたはづだが、　北「そのつれはおいらだはな　彌「エ、いけしぶといやつだもふい、かげんに尻尾を出しおれイヤまて〳〵あそこに犬がねるコ、、シロ、、

ヽヲヽシキヲヽシキ〳〵ハヽア犬がきてもいけしやア〳〵として居おるからさては狐ではねへほんとうの北八か北八「しれた事わりいしやれだ 彌「ハヽヽヽサアおめへのところへとまりやせう（ト心解て北八がいましめた やのてい主）「サアおはいりなさりませソレお湯をとつてこい、おざしきはゐいかな 北「アヽとんだめにあつた（ト あしをあらふ此うちやどの女荷物をざしきへはこぶふたりと もざしきへ ちとふりて）彌「ホン ニ北八了間しやおらア實にほんとうのきつねだとおもいつめた 北「ばか〳〵しいめにあつたいまだに此手首がひり〳〵する 彌「ハヽヽヽしかしまてよ斯はいふものゝやつぱりこれがばかされてゐるのじやアねへかどふやらおかしな心もちだ（ト むしやうに手をたゝき）御ていしゆ〳〵 ていしゆ「ハイおよびなさりましたか 彌「コレどうも合點が行ぬ爰はどこだ ていしゆ「ハイ赤坂宿でござります 北「ヘヽヽヽ彌次さんどうしたのだ 彌「エヽ又はづらかしてゐやアがる（ト 毛をぬらして眉）御亭主さんなんとこゝの内は卵塔場じやアねへかていしゆ「エヽなによヲおつしやる 北「ハヽヽヽおもしろい〳〵（ト 此内かつてよりやどの女）「おゆにおめしなさりませ 北「彌次さん先湯にでも入て氣をおちつけるがいゝよ 彌「ちく せうめが糞つぼへいれようと思つてその手をくふものか ていしゆ「ナニ湯は清水でござりますから奇麗でおざりますマアおいでなさりませ（ト 勝手へゆく女茶くんできたり）「モシ御さみしかア女らうさんがたでもおよびなさりませ 彌「ばかア いふな石地藏を抱てねるこたアいやだ 女「ホヽヽいなことをおつしやります 北「そんなら

さきへはいりませう（ト北八ゆどのへ行この内ていしゆまたぎしきへ出）ていしゆ「ときにおきやくさま、申上ます今晩は私方にすこし祝ひ事がおぎりますから御酒を一ツあげせう（ト一ぱいふうちかつてよりの酒さかなもち出る）彌「おかまいなきるなんぞおめでたいことかの ていしゆ「ハイおさやうでおぎります、わたくしの甥めに嫁をもらひました今晩婚禮をいたさせますから、おやかましうぎりしよ（ト一ぱいひすてゝ立て行北八ふろよりあがり）北「なんだおごりかけるの 彌「こゝの内にこんれいが、あるといふことだコリヤいよ〳〵きやつめがはぐらかすにきはまつたもふ水風呂へもはいるめへ 北「エ、おめへもいゝかげんにしなさりとは執念ぶかへこつた 彌「イヤ〳〵めつたにゆだんはならぬこの硯ぶたもこんなにうまさうに見へても性は馬のくそや犬のくそだろふ 北「ホン ニそふだろからおめへは見てゐなせへこいつは、ありがていおじぎなしにやらかしやせう（ト北八手酌にてさつ〳〵とのみねる彌次郎れいいのいちがきたなくさすがに見ても居れずまじ〳〵して）「いめへましい氣をわるくさしアがる 北「きづけへはね一ぱいのみみなさせへ 彌「いや〳〵馬の小便だろふドレ、にほひをかゞして見せや、ムム〳〵こりやア、ほんとうのよふだ、どふもこらへられぬ、アゝまゝよやらかせ（ト一ぱいついでのみしたうちしながら）「酒だ〳〵ドレ〳〵さかなヲット此玉子は、どふもいろあいが氣にくはねへ、ゑびにしよふガリ〳〵〳〵こいつはほんとうのゑびだ〳〵（ト一つかけ〳〵さいつ、おさいつさつ〳〵とのりかける、此内臺所の方はわん、かぐのおとがたひしときはがしく、とりこみさいちうはなれざしきには、はや婚れいのさかづきごさはじまりしと見えてうたひのこゑする）「四海なみしづかにて國もおさまる時津風枝をなら

さぬみよなれやあひに相生の松こそめでたかりけれ 北「ヤンヤア
彌「コラやかましいわへ 北「やかましいはいゝがおめへさつきから盃
を、はなさねへ、ちつとこつちへまはしなホンニ馬のくそだの、
小べんだのといふかと、おもやア、みやくもひとりで喰うやつさへ
ゝゝ、彌「おらア正直化された氣になつて居たが今おもやア、そふ
でもねへとんだ苦勞をさせやアがつた 北「エ、おめへのくらうした
よりかアおらア縛られて、へんちきなめにあつたハ、ゝ（ト此内かつてより、ぜんも出かれこれするうちざしきにて又うたひうた）「千代もかはらじ幾ちよもさかへさかふる松梅の
ふたばの竹のよをこめて老となるまでも結ぶたのしかりけるめでた
い〳〵三國一の嫁とりすまいたしやん〳〵〳〵（ト手を打たゝきさゞめきわたる此内かつてより女

來り）「あなたがたもふお床をとりましよか 彌「そんなことにしやせう
北「コレ女中祝言はもふすみやしたかさだめて嫁御はうつくしから
う 女「アイサむこさまもよい男よめでさまもゑらい、きりやうよし
ておざります、おきのどくなことはあちらの座敷にねやしやります
から、むつごとがきこへましよ 彌「なんだそんな手合と割床はあや
まる 北「こいつは大變〳〵 女「モウおしづまりなさいませ（ト出て行ふたりも
そのまゝれかけるとはやふすまひとへとなりのざしきへむことよめがねるようすひそ
〳〵とはなしするきけばした地からいろことにてもらひしよめと見へて、なか〳〵しよた
いめんとは見へずぶつたりつめつたりしていちやつく
ようす手にとるよふにきこへ彌次郎北八はれもやらず）彌「エ、とんだめにあわ
しやがる 北「ホンニわりい宿をとつた人のこゝろもしらずになんだ
かおそろしくむつまじいな畜生め 彌「サアはなしごへがやんだから

むずかしい（トだん〳〵ふとんからのり出てとなりのよふすをきゝみゝたてれられぬまゝに彌次郎そつとおきたちふすまのすきまからさしのぞく北八もはだかのまゝはひおきて）北「コウ彌次さん嫁はうつくしいかおいらにもちと見せてくんな　彌「コリヤしづかにしや肝心の所だ　北「ドレ〳〵見せねゑ　彌「アレサひつぱるな　北「それでもちつと退なせへ（ト彌次郎がむちうになりてのぞきいるをひきのけんとひつぱれどものかじといちばるはずみにぱつたりふすまがあちらの間へたをれるト二人はともにふすまの上にころげるむこもよめもおしにうたれてきもをつぶし）むこ「あいた〳〵〳〵コリヤどやつじやいなんせ唐紙を打こかいた（トはねおきた所があんどもひつくりかへしてまつくらやみ彌次郎はちやつとにげておのかれどこへはひこむ北八まご〳〵してかのむこにつかまへられせんかたなく）

北「御めんなせへ手水にゆくとつてツイ戸まどひしやしたぜんてへてゝの女中がわりい夜座敷のまん中に行燈をおくからそれにけつまづいておきのどくだア、小便がもるやうだちよつといつて來やせう

こゝをはなしてくんなせへむこ「いやはやあきれたお人たちじや夜着もふとんも油だらけになつたコリヤおさん〳〵だれぞはやうおこしてくれぬか（トよびたつるこゑにかつてより下女が火をともしてきたりそこらかたづける北八も手もちなくはづれしからかみをはめてひきたてやう〳〵にことわりいふてもとのねどころへかへりすごく〳〵とれかけろ彌次郎おかしく吹出し）

ねて聞ばやたらおかしや唐紙と
　ともにはづれしあごのかけがね

きた八も夜着うちかぶりながら

　聟嫁のねやをむせうにかきさがし
　　われは面目うしなひしとて

斯うち興じて夜もふけゆくまゝに双方しづまり只ひびきの聲のみた

かくなりぬ。　（東海道膝栗毛の内）

聲好きものは龍宮で欲しがる

尾張國熱田の宮に、常に謠を好きて夜晝となく謠ふものありけり、少し海上に地を築出し、爰に一つの亭を作り、かの一曲向ほ怠たらず、或夜更け過ぐるまで謳ひ侍りけるが、海上一丁程沖より大音聲を出し、いや〳〵とほめたりけり、此の聲かの者の耳に止り、いと堪へ難がりけるが、其儘いたはりつきぬ、程經心亂れ已に末期に及ばんとす、時に一門眷族集り歎き悲しむ、かゝりける處に沖の方より俄に震動して身の毛彌立ちけるが、丈け一丈もあるらんと覺し

き男の、眼は日月のごとく光り輝き、面の色一朱注したるがごとく、左右の眉は漆にて塗りたるごとくして、誠に面を向ふるに魂を失ふほどなるが、彼の座敷にむづと居直り、何と養生するとも、明日の暮程に、必ず迎に來るべしと云ひて消すがごとくに失せにけり、兎角いふべき方もなく、さあらば明日は番を置けとて、弓やならひを持つて名宿居して待ちかけたり、又明る子の刻と覺しき頃、海上鳴動して光り滿ちて、件の者來れり、前かどは擊ちも止め、射も殺さんと彝きし者ども、心呆然として足も萎へて、俄の景色にて彷徨ふうちに、其のまゝ彼の病人を抱きて、海中に入りぬ此上は力及ばぬ事なれば、亡き迹吊ひ歎居たる座敷へ又明る戌の刻ばかり

に、彼の男を方々に引裂きて欲しくば還さんとて座敷に投出す、如何なる事とも辨へかねて。（曾呂利物語）

娘と思ふて母親の手

今はむかし娘のけいこ所へ、年頃四十五六の米屋の手代、何かのせはをやいて有時、けふは雪もふれば、誰もけいこにこず、お前もこたつにあたりなさいと母おや娘のあたつている中へ、足をふみ込、遂あぢな心になつて娘の手だと思ひ母の手をにぎりければ、母は大きに肝をつぶし、此里風さんはあきれもしない、何をしなさるといふこへに娘も氣の毒がりて立て行く、母親の言様是里風さんおまへにかぎつて、こういふ事は、有そふもない物。あの子の親ぢともお心やすいゆへ。何もかも御ぞんじの上の事、後家を立て居るのもあの子を相應な所へ遣りたいばつかり。夫に娘の手と取ちがへて、わたしが手をにぎるといふは。おへねへおまへも、しつぶかな人だ。コレおふくろまつたくそふゆふわけてはない。おまへの手としつてに

ぎつたのだ。そんならわたしをなぶるのか。なぶるのでもない。相應な所が有るから。縁付なさるかといふ相談さ。ばからし手を握らずと口で言つたがよい。イヤサ手をにぎつたわの五十兩の支度金と言事よ。（千林亭萬喜）

浪人の腹切廻り

浪人米屋よりだん〳〵の代金たまり遂に大晦日といふ鍔際に到りしかば催促の來ぬうちにと、しほ〳〵として米屋にいたり物をも云はず諸肌ぬぎ脇差を腹へつき立んとなす故亭主驚き、まア〳〵お待なされませ如何云ふ譯でムりますト刀をもぎとれば浪人はら〳〵と涙を流し、今迄露命をつなぎしは言はずと知れし貴殿の大恩、トあツて拂はん金はなし申譯の、此切腹止めずと殺して下されましと思ひ入たる有樣に亭主感心し、いやもう左樣云ふ思召なら金子は何時でもようムりますア、御浪人なされても流石にお武家まア其樣にくよ〳〵思召さずと御酒でも上ツてムりませト言へば、いへ左樣いたしては居られませぬまだ方々へ腹を切りに廻らねばなりませぬ。（生鯖船）

若返りの瀧の水

ぢいは山へ柴かりに、ばゞは内に洗濯も何もせずにゐたれば、程なくぢゞが歸つて來たを見れば二十四五の男になつて歸つた、ばゞは肝をつぶし、こなたどうして其やうに若くならしやつた、サレバ有がたいことじや、アレあの山越えて此山越えて、あちらの〳〵瀧の水を一口飲むと、此やうに若やいだ、こなたもいで飲んでお來やればゞも喜んで、へこ〳〵して行かれたが、途方もなく暇が入るからぢゞが跡からいて見たれば、ばゞは能くどしく〳〵飲んださうで瀧壺のはたで、おぎや〳〵。

（作者未詳）

男の臀を拜み歩く

保濃國草津の湯の山にて、其ほとりの人ども或夜の夢に告げて曰く、明日の午の刻に、三十ばかりの髭男、かげかげなる馬に乘り湯に入來るべし、すなはち觀音菩薩なり、汝等ねんごろに拜むべしと夢さめぬ、村中のものども驚き、夜あけて互に告げければ、みな人つゆもたがはず、不思議の事なりとて、湯のほとりを清め、注連を引き香花を供ふ、國中に聞傳へ夥しく集りて、今や〳〵と待ける に、午の刻過ぐる頃夢の告に露たがはぬ髭男、弓をかたげ、かげなる馬に乘りて來たる、やれ觀音さまよとおほくの人立さわぎてをが

み奉る、此男大きに驚き、心得ぬ事かなと、人々に様子を問へども、たゞをがみに拜むばかりなり、不思議いよ〳〵はれず、ある僧の手に額にあてゝおがみ入たるが許に寄りてひらさら如何なる事にやと問ふ、此僧夢の告をありのまゝに語り、いひちはてず南無觀世音とをがむ、此男人々に向つて曰く、われは甲州がたの侍なるが、ふと狩に出て狼に臀を嚙まれ、疵養生のため湯治に來り觀音とは勿躰なしとて、あなたこなたへにげまどへば人々これを聞きてさればこそ臀くらい觀音と昔から申せば、いよ〳〵觀音樣に疑なしとて、此男の臀につきてをがみあるいた。（作者未詳）

痴話喧嘩

俗に夫婦喧嘩は犬も喰はぬと申しますが夜るが夜中でも構は無い喧嘩を初めまして、夫「冗談ぢやア無いな、お前の樣に愚闇〳〵枕元で言つてちや法がつかないぢや無か、……何うしたのだよ、……眠くつて仕樣が無いぢやア無いか、……寢かして呉んねへ、女「寢かすも寢かさ無いも無、餘りだ、お前樣昨夕何所へ行つたのだへ、……夫「何を云ふのだへ、……女「何を云ふたつて、お前樣、……お前樣昨夕も一昨日の晩げへも歸ら無で、グウ〳〵鼾かいて寢るから愚闇〳〵云ふべゑ、……夫「鼾かくつて他

へ交際で行つて徹夜したのだ、お前愚圖〳〵言ふ事あるめへ、……
……女「お前樣と同志になる時お前樣と一緒に東京へ行くけれども、
乃公東京には親類も無いがお前樣は東京ものぢやないけれど、親戚
も親類もあるだらうけれど、私はなんにも無へのだから見捨て無け
ればと言つたら、見捨て無いからと言ふから同志になつたのだ、
夫「見捨てるとも見捨無いとも言は無いが、……女「夫れだつてお
前樣二晩何所へ行つた、女の子の所へ行つたらう女の子の方でせふ
つて、家へ歸つてグウシ〳〵……鼾かいて寢られちや心持ちが惡
いから言ふべエぢや無いか、夫「然んな事ぢや無いや分ら無いな、……
……女「然んな事ぢや無いつて事あるものか、……夫「手前の樣な

分ら無い奴は無いや、……嫌に
なつて仕舞は、女「嫌になつて仕舞
ふと、……（大聲）夫「夜が更けて
居る靜にしろ、女「此位ゐは小いも
つと大い聲するぞ 夫「斯ん畜生、
……（打つ見得）……女「打ちや
がつたな、……頭叩いたな、……
……夫「分ら無い事云ふから打つ
たのだ……女「然んな事云ふと
おつちんで仕舞ふぞ、……夫「死

んで仕舞へ、……女「死んで仕舞、……首吊るぞ、……夫「勝手にしろ、女「身を投げて死で仕舞ふぞ、……夫「死んで仕舞へ、巡「オイ……開け無いか、……此所を開け無いか、……夫「表を叩いて居らあ、……何誰でありますか締りがありませんから、直ぐと開きますが、……大變だ巡査さんだ、だから大きい聲をするなと云ふのだ、……巡「大分騒しい樣だが何事だ、……夫「何でも無いので、下らない事で、……巡「くだら無い事があるか、……夫「エーッ……今ズー……となんしたので御座います、……巡「オイ〳〵今此前を通ると大聲を發して死んで仕舞、方々が死んで仕舞へ〳〵深更で死ぬとか死ねとか云ふは穏かならん言葉では無いか……

……夫「畜生奴大きな聲をするから斯んな事にならあ、……女「お前さんから云ふから云ふのだ、……夫「乃公が譯を云つて居るのに、……女「お前樣が、……巡「オイ〳〵そうどうも互に爭つては困るじや無いか靜にしろ、……何う云ふ譯で爭そつたね、……お前方夫婦だね、……夫「夫婦で御座います……左樣で御座います、……巡「夫婦ぢやア大分言葉が違ふがお前は東京だが、……お前は他縣だね、……夫「矢張り此方と一緒の國です私も東京のものぢや無いのです、……巡「お前は寄留でもあるかね、……夫「桐生では無いので、……巡「國を問ふたのではないお前は寄留かと問ふのだ、……夫「然んなもので御座いませう、……巡「何んだ……

…原籍は何所だ、……夫「へエ……巡「お前の原籍は何所だへ、夫「東京に居ますが源助の所は、巡「分ら無いなお前の國は何所だへ……

夫「私はなんで御座います……下總で御座いまして、……巡「下總は何所だへ……（此時手帳へ書留られる見得）夫「へエ……お書きなさるのは何うか御勘辨を……、巡「お前の國を書き取るのだ、……夫「夫れを何うか……巡「下總は何所だよ、夫「へエ……

……下總は銚子で御座いまして、……巡「銚子は何所だへ、……

夫「觀音前で……巡「名前は何と云ふ、……夫「吉田忠助……

巡「何才だ、……夫「二十五で御座います、……巡「何商賣だ、……

……夫「職人で御座います、……巡「職は何だ、……夫「大工で御座います……、巡「大工か、……お前は何所だへ、……女「ヒヤ……巡「お前は何所だへ、女「私は下總です、……巡「下總は銚子か、……女「佐原です、……巡「佐原は何所だへ、女「橋本です、巡「橋本と云ふ所か、……名は何と云ふ、女「田中鐵と云ひます、……巡「何歳だ、……女「二十ですよ、……巡「二十歳か、……お前は長女か、……女「ハー……巡「お前は長女か、……女「夫りやもう宜い、……何うでも宜い、寢る前に小便はした、……巡「お前は長女か姉か兄でもあるか無いかと云ふのだ、分ら無いなお前は長女か姉か兄でもあるか無いかと云ふのだ、……巡「是れで樣子を見ると夫婦になつて此東京へ出て來たのか、夫「面目ないんで御座います銚子に居りました

が佐原へ仕事に行きまして、是れの伯母が心安いから泊つて居りまして仕事に出掛けたので、……何で御座います此奴がチヨイ〳〵辨當や何か詰めて呉れますから、氣の毒だと申ますと、此奴の言ふには何うも、……氣の毒な事は無いお前さんの辨當をチヨイ〳〵つめるのも樂みだつて申しますから、私ちも萬更でも無いもので御座いますから、乃公の樣なものにでも一緒になつてと言いましたらお前さんと夫婦になるのは願つたり叶つたりだ……つて、……

巡「嫌な聲をするな、……然、……云ふ事なら萬更の事では無いか、住み慣れた國を出て知らん東京へ來て夫婦になつて居るのぢや、中能くしなければならん、歸る時は故郷へ飾る錦、立派になつて歸らなければならん、……夜も更けて居る、互に大聲を發して不可、お前方大聲を發しては皆此壁一重で他人が住んで居るのだから他のものが迷惑する、……眠る事が出來ないと明朝の業に差支へるのだ、……夫「ま……何うか御勘辨を、……巡「お前さん方が大聲を發しては夜更けて居るから試に困る、……此後もある事だが氣を附けなさい、……夫「あり難う御座います色々御厄介樣になりまして、……巡「是れからなるだけ夫婦喧嘩しないで、……夫「色々御厄介に、……巡「も……宜しい、……分つたかへ、……夫「分りました、……巡「分つたら夫で宜いから戸閉りして寢て仕舞ひなさい、……女「だが私の頭二つ打つて死んで仕舞へ

つて、あんまりぢや無いか、何うか片を附けて貰ふ、……巡「片附け無くとも宜い、私が歸つたら締りを能くして寢て仕舞へば、……
……分ら無い女子だな、……女「お前樣寢れば中がなほりますか、中が、……巡「なほらん事は無いよ、今聞けばお前は佐原で亭主は銚子ぢやないか、何方も下總と下總だから、……根を洗つたらお互ひに千葉縣下（痴話喧嘩）では無いか」。（小ゑん朝）

妙藥の奇特

さる若き男、ふと目をまはしけるに、あたりのものども馳せ集りて、いろ〳〵と、りやうぢしてもがきける、其中にそさうもの、氣

つけと聲の藥りと取り違へて、聲の藥をのませける、まことに藥の奇特にや、かの男、口をうごうごとするほどに、そりやこそよみがへるはとて、人々まもりゐたりければ、暫くありて、死ざやむまいといふ投節を、はりあけてうたひ、ついにむなしくなりし。

（作者未詳）

今度の主人もしはい奴

井の内の蛙は大海を知らず、人は氏よりそだち、さる下男、上京邊の數寄者のもとに一年奉公をつとめける、されば下々のならひに、前の主人を大かたそしるものなるが、あるとき友達の男に途中にて

行あひければ、其方ことしはいづ方へ奉公をすると尋ねける、上京室町にゐるといふ、何と今度の主人も、しはい奴かと問ふ、さればこの四五日奉公をするが、いかさま前の主とちがわぬ、しはいものと見えて、此中も客五人あるに、茶を一服たてたといふた。（作者未詳）

孝行者竹の子に尻を突かる

今はむかし、まづしく暮せしもの母親春の末にたけのこを望む安き事なりとて、はる雨のふりければ、みの笠を着て、鍬をもち竹の林をたづね堀けれども一本も得ざりければ扨は我孝心天へ通じざるか。又あすも來り堀りて見んと歸る。其夜竹の林の近所の櫻の木がいふよふ。なんと桃の木竹といふやつは物をしらねへやつだ。親孝行な者がたけの子をほりに來たのにつらも出ねへ。唐では二十四孝の孟宗が雪の中でさへほり出したげな心ないやつだ。日本の面よごしだおいちが先祖は正直ぢゝいが。枯木に花を咲せふといつて灰をふつかけられてさへ。花の盛りを見せた。左樣〳〵おいらは子供が桃の木柿の木とたづねてくれれば、實の中から芽をだしてやるに。竹のしれねへやぼなやつらだと噂を竹が聞いて仲間一とう相談してあいつらにいはれてはすまぬ、あしたは殘らず出ろと待ている所へ。又簑笠に鍬を持ち。けふこそ授け給へと、てうど堀ば待かまへたるたけのこ。によひと五尺ばかりのが出る。びつくりして又堀ば

二本三本前後出る程に一町四方は竹の子。孝行ものも出る事が、ならずいる内。下から六尺ばかりの竹の子尻をつきかけるから前へ飛拍子帶へつゝかけてさしあげられ。コレハどうしやと鍬をかついで見廻す所へ家主が通るゆへ、モシ〳〵大屋さん稈蒔はいりませぬか。（千島連）

蒲鉾を知らぬ百姓

百姓二三人、地頭方へ御用にてよばれけるが、折ふし振舞の節にて、臺所に蒲鉾ありしを、一人の百姓いふやう、さてもお地頭樣にも諸事簡略をさるへは、あの魚をみやれ板にとりつけてあるが、定めて切ときに俎のいらぬやうにしたものださうな、と庄屋聞いてさて〳〵途方もないことといふて御侍衆に笑はるゝな、あれは今日のお料理になさるゝ、杉燒といふもので、杉の板につけて燒いたものじや、そのやうなことをいへば、知つたおらまでが、外聞がわるいといふた。（作者未詳）

天竺浪人の宿

玉淵をうかゞはざるものは龍を知らずとかや、ずんと遠國のもの四五人連にて京へ初めて上り。内裏樣を拜み奉らんと、寺町を上へ櫻木町を通りしが、火見櫓を見つけて、あれは何をうり買ふ所じ

や、さて〳〵長い家かなといふ、連の内にかしこだてなる男が、さても都は自由なことじや、あれはやり持の雪隱じやといふ、一人がいふはさうではあるまい、人が二三人見えるほどに、あれは天竺浪人の宿であらうといふた。（作者未詳）

四國に狐の棲まぬ由來

古來より四國には狐の棲まぬものといふ傳說があるけれどもその由來に於ては少も根據がないが『本朝故事因緣集』卷三によると恁うだ

昔は四國を二名島と號す、孝元天皇の御宇に、此の國の人民王命に背き國を亂す

此の時天皇の御弟君藩屏將軍と號して二名島に下向し給ひ、逆民を征伐あり、國を治給ふ、是れ伊與の王子と云へり、伊與とは伊と與と書けり、此君の子孫代々相繼ぎ、其末葉河野氏也、處に享祿年中に前河野道直の妻二人に爲る、同姿同衣裝にて同座せり、道直驚き詮議し、何れ一人は化者なるべしとあれば、我正身の妻よ、吾こそ人よ汝化者よと泣き喚き互に爭ふ、醫師來て離魂と申病一女二女となる藥を與へ、禪僧來て古側に倩女離魂の活と云へば、一女二女と成る本則なりと、一喝一棒を示し其外祈禱にても尙如許、通直二人の女を捕へて籠居して數日を經る中ち、二人の女食を喰ふ事別なり、是を捕て拷問す、即ち狐となる、既に可殺に定る時に、僧俗男女四五千門前に聚る、是は何者ぞと問へば四國中の狐訴訟に來候、今度不慮の事仕る者は

狐明神の末稲荷の使者、長狐と申して日本國の狐の王にて候、是を害し給ば國に大災を起すべし、此の長狐吾等共の師匠、化の神變自是斷絶す、願くば助給へと云ふ、河野聞て名譽の狐哉、殺すも不便なり、左あらば四國中一狐も住間敷書物し、皆舟に乘り、中國に渡らば其後ち此長狐を助け、跡より可渡と云、皆畏て誓紙を捧げ、舟を借り數艘にて渡る、自是四國に狐なし、此誓紙子孫に至り、絶たる時は可住國なりと云となり、今に河野の家にあり……

としてあるがツマリ傳說の種類は皆恁ふいふ樣な事が多い……決して信じられるものではない。

坊主は將棊倒になつて死ぬる

關東にて或る侍、主の命に背き、東願寺といふ寺にて腹を切りけるを、明日葬禮をせんとて、厨にては皆用意をし、彼死人を棺に入れ客殿に置き、坊主十人ばかり番をして居たりけり、更け行く間に皆壁に倚掛り居眠りけるに、其中に下座なる坊主二人は、未だ寢入らで物語りして侍りけるに彼の棺震動して死人棺を打破り立出て、然も凄じき有樣にて、燈火の許に行き、紙燭をして火を付け、陶器なる油を嘗る、其後上座にある坊主の鼻へ紙燭を入れて嘗り、次第に下座まで鼻へ入れて嘗り〳〵しける、二人の僧餘り恐しさ

に、息も立てず居たりけるが、次第に近きければ、逃るとはなく走るともなく厨へ仆れ入りぬ、各々瞻を潰し、是は如何なる事ぞと云ひければ、斯樣々々といふ、各々急ぎ行きて見れば、彼の幽靈もなし、棺を見れば別の事もなし、坊主達を起しければ、將棊倒のごとく何れも死入りにけり、種々氣を付けけれども遂に生出ずなりにけり。（曾呂利物語）

問はぬは末代の恥

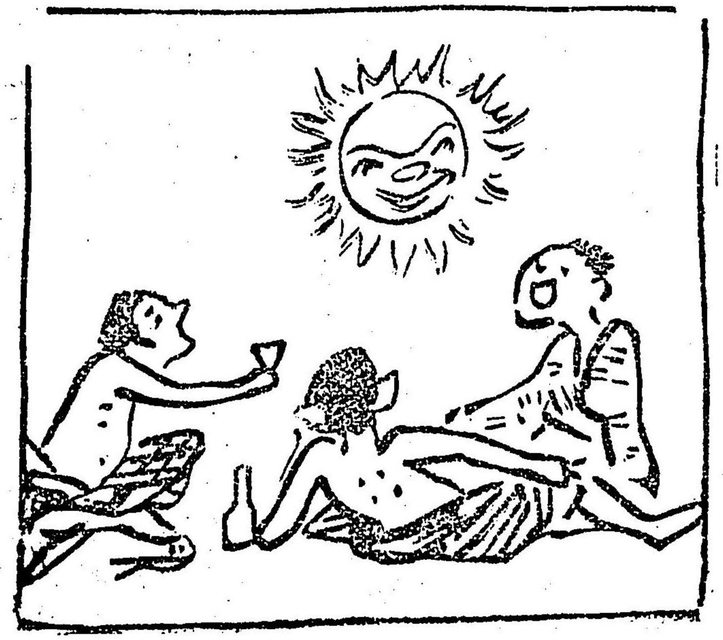
問ふは一旦の耻、問はぬは末代の耻とかや、田舍より京へはじめてのぼりたるもの、さる方にて、書物の上に獅子の文鎭ありけるを、あれは何といふものじやと思ひながら、さすが問はれもせぬ首尾にて眺めゐけるに、相客、さて〳〵しほらしき文鎭かな、唐物はどてやら見事でござるとほめけるを、田舍者よきこと聞きたると、心の中に嬉しく思ひ、とかく獅子のすゝばふたるは文鎭といふと心得、そののち大佛へまゐりしが、下向に山門の内を見て、京のつれにいふやう、さて〳〵これは大きな文鎭でござる、唐物はどてやら見事じやといふた。（作者未詳）

急がずも宜ささうなのを飛び乘りて
ガチヤリと落す辨當の空

土用眞最中の日の見の宴

張吉「ごめんなさい、此間は、和二「さてあつい事で、樂右工門「ヤア引「是は〳〵、一騎當千のつはものおそろひで、和二「イヤさつそくながら、今日御向ふの土場六が所へ呼れやしたから、一ト趣かうして、押込まうといふ所、形りのこせえが異形だから、表があるけやせん、そこで尊宅をあらして着替ようといふ了簡でさんじましたが、どうぞ少々お座敷を拜借、樂「ヤアそれは何よりもつて安う候、まづ奥の座敷へおも〳〵と御通り候へ、ハ、、、、、サア〳〵こゝはは近、さういう事ではなるたけ、向ふへひゞかぬが專一らしい、サア〳〵御遠慮なく、ずつと奥へ〳〵、和二「それはありがたい、左樣なら仰にしたがひ、サア矢場公張公その挨筥を疊をすらねへやうに奥へト（風呂しきづゝみを兩人にてつり、奥の間へ通りて、四人はおもひ〳〵に着替るなりを見て、この隱居もうかれものゆゑ、大きによろこび、とも〳〵手つだひ、また助言などして皆々支度出來上りし所へ、さいぜんの愚慢は和二郎かたをふ首尾に出て、まだこりずまに、地内のちかづきの所をあちこちしやべりあるき今またこゝへ來り）愚「さてけしからん大暑、いかゞおくらしなさるト（づいとあがる、みな〳〵なりあしゝと、ハツと顔を見合せる、愚慢るさいぜん師匠の釜日へ行くといひまぎらせしゆゑ、逢ふてはさすがに面目なく、ハツとしばらくしらけしが、れいの鐵面皮ゆゑ、奥をのぞき）愚慢「ヤアこれはお揃いで、イヤ先刻は大きにハ、、、、トなかしくもなきに、（わらひてまぎらし）さてあれから直に、師匠の方をこゝろざしてめえると、廣小路で仲町のト（指ををり）助次龜八サ、エヽ櫻川善孝、エ里八傳ペ三孝といふ面に、ぴたりと逢やした、イヤ是はお久しぶり

あまり私どもの方を、お見限りだのなんのと、いやみたぷりで、サアいゝ所でお目にかゝつたうきゝの龜八うどんげの花、今日は是非お供しにやアならねえといつて、何といつても、きかねえから、よん所なく、菊千で一盃のませて、ずツと總渡りでやうやう和睦サ、賤はた帶ぢやアねえ



が、思はぬ難に大磯のサ（またはじまつたと思へど、あまり横ぐはへの耳がくもんがにくさに、心世話しき中にも）和二「ハ、、、賤はた帶に思はぬ難もいゝ、ハアそこで今日のお茶は、御延引かネ、フン仲町のだれにお逢なさつとエ、愚「エ、何サ傳パ里八和二「里八はとうに深川には居ませんゼ、愚「エ、左樣〳〵、エートそれに櫻川善孝三孝、和二「善孝は久しく病氣できのふ見舞にいきやしたら、隨分本腹はしたが、まだ〳〵ちよつとも外へは出られねえといひやしたツケが、愚「ハア善孝はお近づきかね、ハアそれは、イヤいゝやつさね、ハアそれはどうして急によくなつたか、エ、それに龜八助次、和二「モシ龜八は四月死やしたゼ　愚「エ、ト（此には少しごまかしかれて）ヤレ〳〵それはかはえさうにまだ若えのに、どうして死、楽見「ナニお

めえ、六十の餘で、久しく老耄したやうで居やした、それがまたどうして今日廣小路でお逢なさつたか不思議だ、ひとりなら幽靈とも思ふが、其つらが幽靈と一ッ所に歩行もしやすめえ、ハ、、、、

愚「成ほど、ハテなんても、龜八だと思つたが、夫じやア人ちがえかしらん、和二「それでも行ちげえじやアなし、菊千で酒を呑で、祝儀までおやんなされば、ちよいと見たぐらゐな事ではなし、矢場「左様サ、それにうきゝの龜八なんぞといふ思ひ付をいつたじやアございませんか、愚「さやう〳〵、申やしたテ、それじやア浮氣のエ、里八かしらん、どうもわたしやアそゝッかしくッてならねえ、ハ、、、、時に樂右衛門さんいかゞで、まだろく〳〵ごあいさつもせずに、ハ、、、、、ます〳〵お碁かネ、イヤ皆さんおもしれえお拵え、ハ、ア茶ばんかネ 和二「エ、まアそんなものさ、たゞ此あついのに、さむさうな顔色をして、むかふの土場六がとこへ押込んで、まごつかせうといふばかり、外に落はなしサ、愚「ム、これやア妙だ、ア、いゝ上下で、ム、ふしきだ、矢場さんの形、ア、どうもいえねえ、いづれも年始の御趣向、イヤどうも感心だト（おのれがふしゆびをくろめんと、しきりにめづらしさうにほめる）矢場「愚慢さん、おまへさんも形をこせえて、お付合なさらねえか、をかしくつてやうございやすゼト（あまりつらがにくさに、なんぞくろしまさてやらんと、みな〳〵すゝめる）愚「有がたう、たゞ厚着さへすれば、外に景物も何も思ひ付はいりませんネ、和二「さやうサ、愚「左様ならおあとからめえり

やせう、和二「どうせ、わたしらも禮者のつもりだから、別々にいきやすから、支度を拵えて、跡からおいてなさいト（和二郎矢場七一トくみさきへいで土場六がくり戸をあけ）和二「へイごめんなさいト（ずいとはいり、和二郎は上へあがる、矢場七は上り口へこしをかけてゐる、このこしらへを見て土場場二もさては先にも趣向ありと思ひ、きうにむれにしあんをしながら、あいさつをする）和二「さて明ましては、けつこうな春でございます、土場「これは〳〵お早〳〵とありがたう、あなたさまにも御機嫌よう御越年なさつてお目出たう和二「へイ〳〵、ヲイ矢場七その御年玉をト（うけとりてしやんさなほし）これはわざと年始の印までに土場「これは〳〵相かはらずお年玉、幾久しく受納いたします、これは頭御太儀こちへ、上んなせえ、和二「なるほど外樣ぢやアなし、ごめんをかうむつて、爰へ來て一ッぷくのまッし、矢場「アイ〳〵左樣なら、まつぴらごめんねえト（矢場七もざしきへとほる、又おもてにて）張吉「御祝儀申しますト（くりなあけはいり）張吉「まづけつこうな春でございます、へイわざとおとし玉、土場「これは〳〵お早〳〵とありがたう、イヤちやうど和二郎さまもお出だから、態と御一ッ所にお屠蘇を上げたい、張吉「ハテそれは丁度よい折、ちよつと一ッぷくいたゞいて參らうかト（張吉もあがれば）土場「イヤ茶見藏どん御苦勞和二郎さんとこの矢場公も御一ッ所に居るから、こつちへ上らツし〳〵、茶見「へイ左樣ならごめん下さいましト（わらじをとき、手ぬぐひにて足をはたき、座敷へとほる）和二「偖先刻は御手紙のおもむき日見の御宴とやら、おまねきくださりまして有がたい仕合、なるほど提灯をかりた禮は申ますれど、日月に禮を申人はございませぬが、是は

折々拜して、おれいを申てもよからうとぞんじて夫ゆゑとりあへませず、初日の心得にて、斯樣年始の支度であがりました、へ、、、、さて兎角ひえます事でござりますナ、土場「左樣でござります、エ、先二階にお席をもうけ置ましたゆゑ、どうぞ、皆さま二階へお通りくださいまし和二「ハ、しからば仰にしたがひまして、サア張吉さま、茶見藏どん、矢場七御免をこうむつて、お二階へまゐりませうト（たがひにあいさつはざつとして、みな〳〵二階へあがり見れば、かれてこしらへ飾りおきし、備物をくはしく見て座につく、下にては）揚二「ヲイ〳〵こつちよりたくみは深いやうだぜ、土場「さうよ先何にしろ、こつちも單物しやアならねえト（單衣より小袖を出し、揚二にも着せ、小袖布子羽織など着かへ）土場「揚公〳〵その七りんの火をみんな大火鉢へいれてもつていかつし、又その上でなんぞ思ひ付きがあらう早く〳〵、揚二「ヲツト承知だ〳〵あのこしれえの請には、まづ屠蘇だらう、土場「ム、、それと煮染屋で重詰らしいものをとり合せて、買にやらうト（今日小づかひにたのみおきし人にいひつけ、買に出し、揚二郎は火ばちへどつさり火を入、二かいへもち上り）揚二「これはごたいくつで、何かぶ人ゆゑはなはだふ手まはりな事、張吉「イヤ〳〵けしておかまい下さりますナ、揚二「ハイ〳〵、二階は格別ひえます、サアちとお當りなさいまし、和二「これはこれは、イヤモウ此せつは火が何よりの御馳走、サア張吉さん、みんなも爰へ來てあたらツし、イヤモウ揚二郎さん、此節の寒氣で痼癖がおこりまして ま事にこまります、甚だ失禮眞平御めんト（ふところより溫石をいだし、火ばちへいれるゆゑ、揚二郎も、ぎよつとし、よほど手あつく仕くみし事と内々おどろき）揚二「へイわ

ざつとお蓋をあげませうト（したへおりる）土場「ヲイ〳〵どうした〳〵、アノクワツ〳〵とおこつた火鉢は、チトおそれたらう、揚二「ところが聞きねえ、取卷いて寒さうにあたりながら、和二さんは、あの火で温石を燒て懐へ入れたせ、土場「エ、イヤどうせいに仕込で來たなア、どうもふいをくらつたから返り打になりさうであぶねえト（使の人かへれば早々てうしへ屠蘇をいれうろたへ、てうし盃持上る、揚二郎も重詰を拵へ、二階へ上る）土場「まづわざとお屠蘇を献じまして、すぐに燗酒をさしあげませうト（いづれも極まじめに、さかづき事すみて）土場「さて是よりあつかんにいたして、日を眺めてたべませう、和二「イヤ日見のお備ものお飾つけかんしんいたします、土場「イエ何かゆき届きませぬ事ばかり、アツハ、、、、、、左樣なら、お心やすだてに猪口にいたしませう、ヘイお燗を見まして、まづこれは御先客へ、和二「てれは〳〵仰にしたがひまして、張吉さまおささへ、張吉「ヘイ〳〵（何かしかつべらしく、これより例の大酒となる所へ、下にて）「御祝儀申ますト（いふこゝろを聞つけ）土場「ハテナ、外に御客は、（慢がきたりしとすねりやうし）張吉「御亭主さん、いづれ年始の事ゆゑ、お客來のかさなります時節、先さまさへ御遠慮なくば、矢張此お席で、御一所にいたゞきませう、土場「ヘイ〳〵揚公どなたか見て來さつしト（揚二郎は下へゆき、見れば愚慢ゆゑ、おどろきながら、もゝ同じ趣向ゆゑ、さてはいひ合せしことゝすね量し）揚二「ヤこれは〳〵お早々と難有うございます、イヤ只今ちやうど、お心やすいお方が、おいで〳〵二階は御酒最中、マア〳〵直に二かいへ〳〵、愚「ハ、ア左樣なら眞平御免下さりましト（例のぶろんりよしんしやくもなく二階へ上る）土場「イ

ヤア是は愚慢大人、丁度よい所へト（土場六はじめ年始のあいさつ一同にすみ、屠蘇などあら〳〵すみて亂酒となる）愚「モシ時に何かおもしろいお備もの、土場「ヘイ今日は手前方では、日見の宴と號しまして、世間のお方は、八月十五夜に月見はいたしますが、月は一晩ぐらいお休があつても閨晦日とぞんじますればさして、事もかけませんが、日に一日御休息あつては、大變でございます、それゆゑ例年日見をいたして、報恩の拜禮を仕ます、愚「ヘエ〳〵それはなアるト（愚慢はこざかしき大馬鹿にて、當時の風俗言ばづかひ又諸藝なに〳〵よらず、ちよい〳〵と横くはへ早がてんにて實はむちやくちやの利た風なれば、このやうなるさしかゝりたる思ひつきごとなどには、たゞまじり〳〵していうけこたへもおもひつきもすこしとできぬなり、折から下へたのみおきたる人上り口よりかほを出し）「ヘイおあつらへの御酌人がさんじましたし土場「さうか、サア〳〵すぐにこつちへ〳〵和二「ハヽア、それはいろ〳〵お手當、御町嘗な、土場「いたつて麁相な品、しかし酒宴は兎角相酌でははつしませぬものゆゑ、ハヽヽヽヽト（いふうち櫻川三孝は烏帽子ひたゝれ神職のこしらへにて、ずいと上り座につく）三孝「これは〳〵みなさまようこそ、エヽ今日は御信心の御招待にあづかりまして、忝うぞんじます、土場「大きに御苦勞さま、左樣ならわざと座付を、三孝「ハヽ、承知いたしましたト（たもとより鈴なだし）ガラ〳〵〳〵〳〵エヘン、「袴も蚊帳もかりとゞまります、ひめもす借りて着〳〵の、ゆかたをもつて、猶よろづの借先を、借つたへに、つたへ、借集にあつめ給ひ、日向の橘の小島が先より一ツさんに、ゆけばほどなく筑紫路や、豐後かあいや丸、はだかで道中がなりやこそ今までふりたてゝ一ツきこしめせと申ウ、（ジワラ〳〵）

和二「ハ、、、、、是は馬鹿とみのはらひ、かんしん〳〵、サア一ツお上りなさい、さて寒いことネ、三孝「左様でござります、鈴をもちます手がこゞえます、ハ、、、、、へイいたゞきませう、張吉「こゝへ來て火鉢へお當り、そこへ上ようか、三孝「イヱイヱ、それへお置きなさいましト（さいしよより、みな〳〵あつさをこらへ、ない〳〵汗をぬぐひ、またはうつかり扇をつかひ、ハット心づきやめるなど、いろ〳〵ある）し矢場「三孝さん間違つてさつぱりお目にかゝらねえが、だいぶ流行のおうはさ三孝「へイ〳〵有難う、此通り汗が、ヱイヤ冷汗が流行いたします、アツハ、、、、、イヤまだ、お出入場もすけなうござります故、牽頭のせり賣に、外をよんであるこうとぞんじますテ、茶見「ハア何といつてエ、三孝「へヱ三孝常住ふるめえの世話やきと申て、ハ、、、、、茶見「ハ、、、、、和二「イヤ大そう枕をならべたほどでもねえ、ハ、、、、、時に愚慢さんに、さつきお目に懸つたさうだが、外の手えゝのは、どうしたエ（此にて三孝にはいつこうわからず）三孝「エどなたに、お目に、和二「この愚慢さんにヨ、三孝「へイまだ間違まして、お目通りをいたしません、ぶてう法もの、何とぞごひゐきを、土場「ヲヤ〳〵愚慢さんはまだはじめてかえ、愚「エ、左様サ、張吉「ハア、それじやアさつきおあひなさつたのは、どこの三孝だネ、愚「エ、なるほど、どの三孝であつたかサ、矢場「湯屋の三公かネ、張吉「それでも櫻川三孝とおつしやたが、愚「左様サ、イヤはじめてのとき梅川で近付になりやしたから、梅川かしらん、茶見「ハ、、、、、梅川三孝大

權現なら、木母寺で塚築におなんなすつたらう、みな〳〵「ハ、、、、ハ、、、（愚慢もせん方なく）愚「ハ、、、、ト（まざらせに笑へども、まことに首尾わるく、ひよんな所へわりこみゲウの音も出でぬを。こきみよく、最初は連中同士うちの催しなれど、愚慢のさび入につき、たれいひ合れど、みな〳〵愚慢にばかりかゝるなり、三孝はいまだ愚まんが手なみを知らればひとりしよげで居るを氣の毒に思ひまぜかへす）三孝「此お猪口は境論がはじまりさうだから、ひろひませう、〳〵此頃はよほどのめてさんじました、へイ愚慢さまおそれながら献じませう、愚「アイ〳〵ト（汗ばかりぶいてゐるのみ、）和二「時に御兩人今日のお催お銜付と申し、御料理、お取持、一々かんしんいたします、所で月の宴には何れ腰折れの一首もいたします事なれば、日見にも出たらめを詠じて備へましては、いかゞでござりませうト（これも愚慢をくろしませんと、みな〳〵目くばせにてしらせる）土場「ヤ是は一向に心付ましなんだ、さいはひ愚慢さまはおいでなり、左樣なら一首づゝお願ひ申します、張吉「是はおもしろい事、しかしかういたしませう物干へあがりまして、日をながめて吟じませう、場二「さやう〳〵、順を定めて、一人づゝ上りまして、歌の出來るまではおりることを禁じまして、外の者は、それをながめて、爰で御酒をいたゞきませう、三孝「なるほどこれは面白い御趣向、しかしかやう申す三孝なんぞは、和二「足下はゆるすから執筆をつとめさつし、そこで一二三の闘をこしらへませうト（闘をこしらへ、みな〳〵ひく）矢場「是はなりたけ、跡へまはりたいものだ、茶見「丈夫な無盡さネ、ハ、、、、、張吉「サア〳〵一ばん、イヤ大變〳〵、矢場「サア〳〵物干へお上りなさい、張吉「ハイ〳〵是はは、難澁な

事、すこしお待下され、チト冷汗をふきまして、ヲヽさむい〳〵、此まアふきはらしへ出る事かト（物干へ出づれば、しきたる蒲は火の如く焼きばらくあつて）張吉「サア〳〵早く出たり〳〵、三孝「なんと〳〵、張吉「まことある、友に呼れし日見のえん、エヽもうたまらん〳〵、三孝「ヘイ、モウたまらんかね、張吉「何さうではねえヨ、エー引あつき恵みにあふぞくるし、イヤイヤ嬉しきだ〳〵、和二「ハヽヽヽ出來た〳〵、さて二番は、矢場「ヘイわたくしト（入かはり是もしばらくあつて）矢場「面影をくろうするのも色なれや、三孝「ヘイ、夫から、矢場「日見ゆゑならば、何いとはまじヤレヤレ、嬉しや〳〵、足のうらが、エヽ、つめたくてやけるやうだ、サア三番〳〵、茶見「ヘイかしこまりました、土場「かしこ

まつてはならねえ、立のだヨ、茶見「ハイ〳〵ト（また入かはり）なるほど是はさむい〳〵、歯の根があはねえ〳〵、揚二「サアなんと〳〵、茶見「まださうはさんじません、御催促なくと、こちらがいそぎます、サア執筆〳〵、三孝「ヘイ〳〵サア茶見「エヽ、萬物を照らさせ給ふありがたさ、あふぎてもなほあつき日の影、サア替りだ〳〵、張吉「サア四ばんは、揚二「ヘイみづから、茶見「早く物干へ出さつし、みづからでも、ぢき湯になるゼト（自入かはる）揚二「ヘイすぐに申ませう、張吉「どうで跡へまはるとくるしみが薄いぜ、揚二「ハイ、綸言にたとへし汗もかくやらん、三孝「ヘイよろしう、揚二「日見〳〵たればしん〳〵と出る、茶見「なんだか、れんぞくしねやうだノ、和二「なんでもいゝ〳〵

サア五ばん〳〵、土場「ハイ 私ト(いりか)張吉「イヤ御亭主さま〳〵なんと〳〵、土場「ヘイ中上ます、日見の宴秋の最中の月ならで、さんご、にッちうの神職を聞、和三「ハ、、、、、三五夜中か、地口のつめ孝 日中 歌だネ、ハ、、、、、サア六ばん〳〵(愚慢はさいぜんよりへんな顔色してゐたりしが)愚「ハイ六ばん、わたくしではござりますが、チト、張吉「ヤア〳〵愚慢大人サア是が今日の秀逸だ、矢場「イヨ〳〵待て居ましたゾ〳〵、愚「イエ私はサ、此歌がチト、土場「なんの〳〵、もう出來てをりませう、サア〳〵まづあれへお上りなさいト(口々にいひすゝめられ、よん所なく物干へあがりゝわざと聞えるように)和三「矢場公おいらたちのいふのは、地口か、落首か、わからねえのだが、是がほんの和歌といふのだゼ、しづかにして聞ツし(などゝ口々にうはさを

しながら、たかしさたかくし、愚慢がくるしむをさかなに、さへつおさへつ呑でゐる、愚慢は何かにまぎらさんとくるしさをつゝみ)愚「モシ酒の席に歌でもありやすめえ、これやア和睦として、一盃いたゞきてえネ、ハ、、、、、矢場「どうして〳〵是までにして、そんなひやかしなしサ、張吉「左樣サ、場行がくづれてはわりい、そして今までのやうなふざけたの計では詠草面がわりい、和歌でも詩でもようございます、どうぞ御願ひ、愚「イエサ今日はどういたしたか、其和歌も詩もチト、茶見「和歌詩がわるくばあやまる事はなりませんゼ、愚「それに頭痛がいたしてト(しきりに汗をふき、足をつまだて、また片足づゝあげ、つむばかりひかりして居る)和三「モシ私もチトおせうばんに、それへ參つて、詠めませうト(物干へあがる)是はなるほど座敷と違つて、吹さらして寒い〳〵、

ア丶よく日がさえましたナ、しかし筑波の方から夕立雲をだいぶ上けますが、ゴロ〳〵は、チト恐れますナ、しかし、雲をり〳〵人をたすける日見の宴とやら少々日に雲のかゝつたも、又一ト氣色でござります、愚「左樣〳〵、雲でも雨傘でもチトほしうござります、和二「ハヽヽヽ、御尤で、ハヽヽヽ、ヘイ、私はごめんをかうむつてお先へこぢつけませう、ヲイ三孝さん、三孝「ハイ〳〵、和二「おのれから飛んで日見いる夏虫の、困り〳〵て身を焦すらん（みな〳〵どつと笑へども愚慢は一向わからず）和二「ヘイ愚慢さんお先へト（おりろ、もはやたまりかね、半死半生のていにて）愚「エヽ日見の宴、土場「そりや出ました〳〵、和二「だまつて〳〵、三孝「ヘイ日見のえん、愚「エヽ引十五夜ではなく、エー引十五晝なり

けり、ヘイまづ是で、ごめんをかうむりやせう、土場「モシ〳〵しばらくそれに〳〵ぶし付ながら、まだ歌になりません、もうすこしだ〳〵、エヽ引日見の宴、十五夜ではなく十五晝なりけり、それから跡はト（せがまれて、泣き出しさうな顔にて）愚「モシ〳〵どういたしたか、しきりに腹痛がいたしてト（顔色變じ、もだえるようす、寝亂でもせしかさ、みな〳〵すこしおくれたる折ふし、夏日のならひ、出しぬけに）グワラ〳〵〳〵ゴロ〳〵〳〵〳〵ト（遠雷のひびきに六人さも、だいのおくびやう雷きらひゆゑ、一やうに顔色靑菜にしほ〳〵と、愚慢をくるしませし罪など思ひまはし急に氣がをれて）揚二「愚慢さん、おあんばいがわるくば、モウ爰へお出なさい、愚「ヘイ左樣ならごめんをかうむつて、ふり出しませんうち、わたくしはお先へト（いとまごひもそこ〳〵に、大汗ながしかへり行、跡にみな〳〵顔見合、遠雷に肝をひしがれ、しばらくはきようさめしが、さしてつよくもならぬやうすに、また〳〵例の大酒となり、むつましくその日は呑くらしぬ）。

（和合人）

相撲狂

いたッて相撲好きの親父けふは息子が見に行ッたによッて何でも歸ッたら話しを聞んと思ひ待かねて居る所へ間もなく歸りければ内へ這入るか這入らぬに、是息子谷風と和泉が今日の勝負如何有しぞと問へば、いやもう面白き事先づ立合と其まゝ谷風が二つき三つきかう東の方へはねて行く所を和泉がじッとふみこたへずッと寄て左を差した谷風も右を差してよつになるによッてさア相撲が長く成て兩方岩の如く動かばこそと座敷の眞中に大汗流し引組で居れば外から這入り來たる客が此躰を見て親子喧嘩と心得、これは〳〵どうでム

る去りとはつまらぬまア〳〵こゝを放してたまへとやう〳〵に兩方に引分くれば親父息を切ながら、成程おれも引分にならうと思ッた。（書名未詳）

時宜のいひ置

形は產ど心は產ぬならひ、さる有德なるもの丶惣領、はたちばかりなれどぬく太郎の名を取りしが、かしこき手代を付け世間を勤めさせしに、方々振舞に行き馳走の料理を喰へども、時宜も挨拶もいはねば、亭主手もちなき風情たび〳〵なり、手代氣の毒に思ひ、つね〳〵いひ教へけり、或時晴なる所へ、手代も召つれ振舞に行き、ぬ

く太郎上客なれば、床わきになをる、さて勝手より膳を出すを見かけて、御亭主樣々と呼んで、これはいかい御馳走御料理といひ、あんばいも出來ましたといふ、時に手代汗を握り睨みければ、ぬく太郎うなづきて、忘れぬ先きにといふた。（作者未詳）

手習子

今を盛の花の山、來ても三(見)吉野花影、飽ぬ詠の可愛らし。遲櫻まだ蕾なり、花娘、寺古屋戻りの道草に、てんと見事な色櫻、雛草結ぶ島田髷、はしたないやら戀ぢややら。肩縫上げのしどけなく、紙捻喰切り緣結び、ほどけかゝりし繻子の帶、振の袂のこぼれ梅、花の笑顏のいとしらし。二つ文字から書き初めて、恪氣恥かし角文字の、直な心の一節に、御師匠さんの仰つたを、ほんに忘れはせぬけれど、ふつつりと恪氣せまいぞと、嗜んで見ても情なや。未だ娘氣の後や先、あづまへもなきあどなさは、粹なとりなり目に立つ娘。娘々と澤山さうに、云ふておくれな、手習覺え、琴や三味線踊の稽古、云はず語らぬ我心、亂れし髮の亂るゝも、つれないはただ移氣な、どうでも男は惡性者。櫻々と唱はれて、云うて袂のわけ二つ、勸さへたゝうかゝると、どうでも女子は惡性者、東育ちは蓮葉なものぢやエ。戀のいろはにほの字を書て、それで浮名のちり(散)ぬるを、わかよたれそつねならむうゐ、心おく山けふこえて逢うた夢見し嬉しさに、飲めどもさらに醉ひもせず、京(今日)で戀路の淸書なり、妻の爲めとて、天神樣へ願かけて、梅を斷ちます、メイワク〳〵サア〳〵、我一代斷ちます、メイワク、梅を梅をた

ちます、メイワク、サア我一代ジッホンニサウヂヤイナ、品もよや。諸鳥の囀
椿々の枝に移りて、風に翼のひら〳〵ひら、梅と椿の花笠、着ぜて〳〵、眺
盡きせぬ春景色。（江戸長唄）

龍田姫は古猫

某の娘成人するまゝに、女房達數多つけ侍る、茲に何處ともなくい
とあでやかなる女一人行みて、宮使へ望み侍る由言ひければ、幸ひ
御内にこそ御身のやうなる人を尋ね侍るなれ、いざ給へ、北の御方
にかくと申さんとて言ひければ、即ち留め置かれたり、彼の宮仕の
心に入たる事はさて置き、繪書き、花結び、手跡うつくしく、縫物

などは七夕の手にも劣るまじく、もの
いろあひなど染め出せる事は、龍田
姫も耻ぢぬべきほどなり、或時北の方
女の部屋を垣間見しに、夜いたく更け
て燈火かすかなるに、己が首を取りて
前なる鏡臺に掛け置きて、鐵漿をつけ
化粧して又我がこゝろにつぎて、然あ
らぬ躰にてぞゐたりける、恐ろしとも
謂はんかたなし、さて主の殿にかゝる
事侍るをば、如何はからひ給ふぞとい

へば、まづ何となく暇を出せといふほどに、女を近づけ、近頃いひかね侍れども人多く侍れば、一人も二人も暇を出せとの給ふあいだ、其方のやうな調法の人はましまざぬほどに、いつまでもと思へども、いづれも譜代のものにて、暇出されぬ者どもなれば、まづまづ何かたへも出られ候へ、そのうへ夫の命背きがたく侍れば、かさねて娘嫁入の折ふしは迎へ侍らんといふ、其時女氣色かはりて、さては何ぞ御覽じて、かくおほせ候やらんと、傍へ近く居寄れば其方は何事をいふぞ、又やがてこそ呼ひ侍らんと然りげなくの給へども、いや〳〵曲もなきことなりとて、飛かゝりける所を、男かねて心掛けるにや、後に立添ひけるが、刀を拔きはたと斬る、斬られて弱る所を引直し、心のまゝに斬れば、年經たる猫の口は耳まで切れて、角生ひたるにてぞおはしける其名を龍田姫といひ侍る。

（曾呂利物語）

丁稚が下女への無心

ある年季の丁稚、下女のりんが側へよつては。コレおりんどんてなたに無心が有〳〵と。たび〳〵いふ。なんだ小まつしやくれたがきだ、いけすかねへといへ共餘りたび重ればいな舟のいなにはあらず、少しはとうがらしもくつて見たひ心の所へ。又おりんどん無心があると言。さいわい人もあたりにいず。コレ太吉どん無心とはな

んだよといわれ。どうもはづかしく言にくひコレおつつけてください。なんの事だおつ付てくれろとは。おれにおつつけてくれなさいといふ事よ。コレサそばへよつていわつせへおつつけろとは何を。おれがくふ飯をば杓子で。（紀輕人）

曲屁

折角お招き申しても、あんまり何にもお愛想もない事、しかし一つの御馳走には、私女房が曲屁を少々ひりますから、客「コレハ一段の御馳走忝ない、然らば一曲、女房「スツポン、客「これは何でござりまするな、女房「あれは後藤目貫の鐵砲の段、客「ハヽアこれは飛んだ當り〳〵、女房「次は忠臣藏の九段目、尺八の音フウ〳〵、客「あまりくさく御無用。（作者未詳）

惠方詣

旦那「予は親父の代參で惠方詣りに往くので、今日は親父から許可を受けて是から出掛ける處さ、幇間「へヱー成程併し若旦那はお美しいね、チヨイと家橘の容子が有て我童の工合が有るかと思ふと團十郎然とした處が有り菊五郎左團次てヱ模樣が有て又は小團次川崎屋新駒の風が有てチヨイと高福の容子が有るので實に恐入やしたナ勘五郎壽美藏田之助源之助竹次郎舛藏と有名の俳優を十七八名集合やう

な塩梅でお口の利きやうが新藏の容子合が有て八百藏の調子が有て團八から吉六……、旦「種々に成るネ、幇「イヤ是は恐入りました餘りお饒舌を致すとツイ失策りますが大變に今日はおめかしで亂立の古渡のお羽織何うも好いお粉裝でげすナ當世風に襟巾を狹くして胴裏は蝦夷錦の陣羽織を解いたんで宜うがアすナお召は市樂でお下着は柳川の琉球紬で宜うがアすナ戴き度いネ私は地問或織物會社の今泉さんと云ふ旦那さまに御贔負と成まして飛白の結城紬を一反戴きましたが上等ですナ十二三圓某も爲やうと云ふ上等を頂戴致しましたから尊公に差上げ貳拾圓戴き度いネ、旦「差上度いといふ處は感心だが跡でお金を戴き度は恐入たナ 幇「へ、、誠に恐入ましたが何にしてもお夾嚢が立派なもので金革の二ツ折中に何の位札が這入てるか拝見を爲たいなア 旦「何んで人の懐を改めるてエ奴が有るか 幇「猩々の緒〆めで筒が宜うがアすな金無垢のお煙管へチョイト銀滅金を爲て金物が何んでげすヘエー然うでげすかイ金の獅々の狂ひで宜うがアすなチョイと目貫に有ます形で餘程宜うがアすナ夫れに帽子が宜いネ佛蘭西形の山の低い戴き度いねへ 旦「此人は無闇に譽めるのも宜いが譽めた跡で何でも呉れ〳〵と云ふから本統に困ッちまふ 幇「お足袋は三枚踏是はお徳でげすヨお駒下駄は仲通りでお購求に成りましたか本統に今日は恵方參りにお往に成るんでげすか旦「ウン是から成田山へ參詣に往くのヨ 幇「新勝寺へでげすか旦「ナ

ニ成田山へ往くんだ 幇「だから新勝寺へ往ッしやるんてげせう 旦「解らねへ男だナ成田山へ往くんだてエに 幇「だから新勝寺じやア有ませんか御存知の癖に困りますネ、成田山では新勝寺で東叡山寛永寺サ金龍山淺草寺萬松山泉岳寺一緣山妙法寺池上山本門寺と云ふやうに、山號寺號てエものは何處にでも有るぢやア有ませんか 旦「ウン是は恐入た和郎は大變に博識だネ此處で和郎に逢つたけれ共此近所にも其山號寺號が有るかイ 幇「なアるほど（天窓を掻く）旦「何處にでもてエは何處にでも無ければ成るまいと云はれ一八は扇子にて額をボカ〳〵叩きながら一八「成る程……時々失言きを爲て失策りますからネ此間も他家へ吊詞に往てお芽出度うと云て毆打れたり御年

始に往て御愁傷と云ふやうな粗々かしいので先達ても他家に盆栽の會が有るてエますから如何な別嬪が出るかと思つて往たら植木盆計り並んでましたが能く考へて視ると權妻と盆栽と間違る位で時々困りますんでげすへエ……旦「イヤ和郎も幇間の片破に成て居ながら失言をして纏めないてエ事は有るめへ如何だエ一八さん寺院でなくツても山號寺號で寺院のやうに聞へたらお禮として半助（五十錢）進げやう〳〵ぢアないか、一八「へエ……何んでげす本統に呉れますか 旦「ナニ予が虚言を吐くものか一八「アノ五十錢……アノ拾錢銀貨を五個 旦「同じ事だ、一八「アノ一錢の銅貨數五十、十文錢數知れず 旦「何にを云てるんだ屹度進るヨ、一八「然うお話が極れば俺は一

心不亂に考へます……ア旦那向ふに大紋付の半纏を着て居る若い衆が垣根を拷へてましやう彼で一番見立てやした植木屋さん懸念寺てエのは何うでげしよう　旦「なアる程植木屋さん懸念寺が旨えなア……（懐から金を出し）サお禮を進るヨ　一八「直ぐにお手づからお禮を頂戴は難有い……直ぐに斯う奪れんやうに懐へ仕舞ッちまつてと……何にか有りませんかナ……ア有ました何うでげせう向ふから盲人が杖を突いて來ませう彼で考へました按摩さん揉療治なんてエのは何うでげせう　旦「なアる程是は恐入たけお體を進るヨ　一八「是は難有いエヤレと斯う懐へ納れちまつて……漬物屋さん金山寺なんてエのは何うでげせう……　旦「漬物屋さん金山寺イな

アる程是は驚いたなアサお禮を進げるヨ……一八「嬉しいネ是は少し無理か知りませんが時計屋さん今十時なんてエのは　旦「成程ソレ約束通り進げるヨ　一八「何んかまだ有そうなものでげすナ何うでげせう斯う云ふのは餅屋さん道妙寺なんてエのは　旦「ムヽウ種々あるネ是は迂濶り惡い言を云て仕舞た大分金を取られるナ夫れ進るヨ……一八「向ふから支那人が革嚢を提げて方々の家へ商賣を爲て歩行いて居ませう彼で考へました　旦「何んと　一八「南京さん珊瑚珠なんてエのは何うでげせう　旦「なアる程種々發明を爲ますネ、ソラ進るヨ……一八「何うでげせう向ふから柳屋の小さんが來ましたらう小さん元燕路なんてエのは　旦「何うも種々出來ますネ、ソレ約束通り

進るヨ……小僧待ちねへ一八に先刻から大變取られちまつた丁松「巧くやるナ此ン畜生、一八「だつて若旦那が俺に儲けさせるてエんだもの早晩に幇間銀行を立てる心算でげすが何にかもつと有りませんかネ……アお待ちなさい向ふから廿五六の年増が小供を抱いて來ましたらう穩婆さん子を大事なんてエのは如何でげせう　旦「是は恐入たなア、一八「何うでげせう一ツ彼の花井お梅で考へましたが小秀さん暴療治なんてエのは　旦「なアる程是は何うも不思議だ、ソレ進るヨ……一八「難有いなア……何にかもつとないか知ら……何うでげせう向ふから御交替のお役人が來ましたらうお巡査さん捧大事なんてエのは　旦「ソレ……一八「何うも大變に儲かつちまひますなア

旦「今度は予が一番考へやう一八「イヤ御趣向……　旦「予は素人だから巧くは出來ないが先刻から予が遣たお禮を皆な茲へお出し一八「ヘエ私の戴きましたのを斯う出しまして　旦「此金を皆予が懐へ入れちまうんだ一八「ヘエー懐へ入れて　旦「コレでと云ひながら驅出して　旦「一目散隨德寺……一八「ア……南無三爲損じと云たら小僧さんが後で丁松「ア……旦那さん好い案じ。（ゑんいう）

雷神と臍

ゴロ〳〵と鳴り出すと臍を匿せとは古くからの諺である、雷は臍が大好き、鰡の臍は雷の子供の喰物だと俗間に傳へられてゐ